
創造王の遊び場

辺 鋭一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

創造王の遊び場

【Nコード】

N1988Z

【作者名】

辺 鋭一

【あらすじ】

ある日、トラックに轢かれそうになっている子どもの身代わりになり死んでしまった男が、神に興味をもたれ、転生するお話。

プロットも構想もろくに練っていない行き当たりばったりなお話なので、基本的に不定期です。それでも良い方は、どうぞご覧下さい。

プロローグ 1 (前書き)

初めての連載小説です。

行き当たりばったりですが、どうか温かい目でご覧ください。

プロローグが少々長くなったので三つに分けました。

プロローグ 1

……どこだここは？

なんだかわからないが、今自分は和室にいる。

それも茶室のような狭いながらも趣のあるような所ではなく、大奥などの時代劇に出てきそうなとても広い畳敷きの部屋だ。

部屋の真ん中に寝転がっていた体を起こし周りを見てみるが、見えるのは木目のきれいな天井と、自分を取り囲む穴などどこにも空いていないまっさらな障子と、床に敷かれた新品同様の畳だけだ。

畳二百畳分ぐらいありそうな広い部屋には和室にありがちな掛け軸や壺などの飾りは一切なく、それどころか障子以外の壁は全くない。

障子を開けて外に出ようとするが、そもそも開けられるようになっていないようだ。

何しろ同じレールの上にすべての障子がぴっちりハマっているため、取り外すために障子を持ったための隙間すら作れない。

仕方なくぶち破ろうとして体当たりや蹴りなどを放つも、ぶち破るどころか穴をあけることもできなかった。

触る分には普通の木と紙の感触しかしないし、紙の部分を少し押してみても普通の障子紙のように向こう側にへこむが、そこからはいくら力を入れてもびくともしない。

同じ場所で五分ほど障子と格闘した後、障子に沿って歩きながら観察し、一周してみたがどこも同じよう脱出は不可能だった。

体力的にはともかく精神的には参ってきていたので、さっきまで自分が寝ていた部屋を中心まで戻りドカッとすわり腕を組んで考える。

……落ち着け。まずはどうしてこんなところにいるのか考えるんだ。

まずここに来るまで私は何をしていた？

そう考え思い出すのは、朝、大学に向かう途中の道の風景だ。

今日の講義の教室の場所はどこだったかなと考えながら校舎に向かっていているとき、ふと視界の隅に何か走った。

何かと思い見てみると、小学校低学年ぐらいの子どもが自分の横を走り抜けていったようだ。

自分にはもうない元気な無邪気さに微笑ましい気持ちになっていると、子どもはランドセルを揺らしながらそのまま元気に走っている、かなり急いでいたのであろう、十字路を渡ろうと車道へと飛び出していった。

……すぐ近くに来ているトラックに気が付く様子もなく。

その道は以前からドライバーからの見通しが悪く、飛び出してく
るまで誰がいるかわからず、信号も設置されていないため事故が多
発し、何人もなくなっている危険地帯であり、地元住人の嘆願によ
り、鏡や信号設置の計画が立てられていると聞いたことがあった。

現に自分も、道の端にひっそりと置かれている花束を何度か目に
したことがある。

目の前で道路を駆け抜け始めている子どもと、迫りくるトラック
を見て、そして以前見た花束が大型車の通った風圧で揺らされてい
る光景を思い出し、

気が付くと全速力で走っていた。

トラックが子どもにどんどん近付いていくのを見ながら自分は走
り続けた。

インドア派で体もあまり鍛えていなかったために動きが鈍い自身
の体を恨めしく思いながら、それでも体を前へ押し進めていく。

それぞれの位置関係から、このままだと子どものもとへたどり着
いたすぐ後にトラックにぶつかるだろうと計算し、それでも走らな
いことを選択肢から除外し、駆けてゆく。

そして大きな二車線道路の手前側、ちょうどその真ん中で子どもに追いつき、右から迫るトラックの姿を感じながら子どもの背負ったランドセルの上部にある持ち手をつかみ、思い切り引っ張るようにして後ろに放り投げる。

振り向くようにしてみた子どもの顔は驚き一色で、空中にいることも相まってとても滑稽に見えた。

そして、自分の顔に微笑みを浮かべながら、しりもちをつくように安全なところへと落ちていく子どもの、

着地の直前にトラックのぶつかる衝撃を感じ、自分は意識を失った。

あらかたのことを思い出し、

……よく生きてたな、私は。

とか考えながら、自分の体を確かめるがどこにも傷はなく、先ほどまで動き回ったり障子相手に格闘していたことを今更ながら思い出し、疑問を強くする。

……いくらなんでも無傷はないな。まさか夢落ちか？

ここは見た感じ病院ではないし、ではどこなのだろうと考えながら、ふと、ここに来てから一言も発していないことに気が付き、どの調子を確かめようと少しの茶目っ気とともに声を発した。

「ここはだれ？ 私はどこ？」

「逆じゃろ、それは」

いきなり聞こえてきたしわがれ声に驚き、振り返りながら立ち上がり身構えると、そこには禿げ頭でもじゃもじゃの白いひげを生やし、藍色の着古したような甚平を着た爺さんが立っていた。

驚きながらも、疑問に思ったことを尋ねる。

「あなたは誰だ？ というかいつからそこにいた？ それ以前にどうやってここに入ってきた？」

「ずいぶん質問が多いのう。質問は一度に一つずつと教わらなかったのかの？」

「それは失礼した。では、今のこの状況を説明してただけのとありがたい。いきなりこんなところに連れてこられ、少々混乱している」

「先ほどからの行動とここにきての第一声から鑑みるに、あまり混乱しておるようには思えんのじゃが……、儂や、おぬしが何か話したら出てこようと思っと思ったんじゃが、案外のんきじゃのう、おぬし」

「そんなことはない、混乱した時こそ冷静に行動しないと痛い目を見ると経験から学んでいるのでね。それに、緊迫しているときほど先ほどのような冗句が冷静さを生み、解決策を与えてくれるものだとも思っている」

「一步間違えれば何も考えて無いバカじゃな。どうでも良いが、その無駄に偉そうな話し方どうにかならんのか？ わし一応おぬしより長生きしとるんじゃないが」

「それはできない。私は相手が目上だろうが目下だろうが万人に対して同じ姿勢を貫く事になっている。個性として受け止めたまえ」

「下手をしなくても周りが敵だらけになると思っんじゃないが」

「そんなことよりご老体、まだ私の質問に答えていないぞ。早く私の現状を説明したまえ」

「おお、そうじゃったの。はっきりいうがの、おぬし、死んだぞ」

……は？

プロローグ 2 (前書き)

プロローグ 2 / 3です。

では、さようなら。

プロローグ 2

「……すまないご老体、今少々聞き取りづらくてね。もう一度言ってはくれないか？」

「じゃから死んだんじゃて、おぬし」

「……ご老体」

「何じゃ？」

「自覚は無いと思うので控えめに言わせてもらうが、あんた頭おかしいぞ、ボケが始まったのではないか？ よければ良い医者を紹介するぞ？」

「控えめという言葉考えた人に土下座してこい。ともあればけとらんわー！」

「ご老体、ボケた人間は皆そう言うんだ。狂人が自分の事をまともだと思っているようにな」

「それおぬしにもぶーめらんするぞ？ ともあれわしの話を最後まで聞けい。話はそれからじゃ」

「良いだろう、話を聞こう」

「本当に偉そうじゃのう。怒りや呆れを通り越して感心してきたわい。まあともかく説明を始めようかの。」

「……ここは死後の世界じゃ。それで儂は神じゃ。」

「ああ、突っ込みは後にせい。今は僕のたーんじゃ。」

「なに？ 慣れない横文字は使うな？ いいじゃる別に、僕の勝手じゃ。」

「ともあれ話を戻すぞ。」

「まず大前提として、おぬしは死んだ。とらっくにはねられての。覚えておらんか？」

「夢ではないぞ、すべて本当にあった事じゃ。全身を強く打ってほぼ即死じゃ。その時の様子を見てみるか？ かなりむごいぞ？」

「……まあそのほうがよからう。あまり見たいものでもないしな。」

「……ああ、あの子どもなら無事じゃよ。投げられたときに尻を打ったぐらいでの。」

「……まあ目の前で人がはねられたのを見てしまって、少々精神的に参っているようじゃがの。」

「……まあ、今のかつんせりんぐ技術はなかなかのものじゃからの、何とかなるじゃろう。」

「……まあその子の話は置いてじゃ、今はおぬしの話じゃ。」

「本来の運命なら、あの子どもはあの場でとらっくにはねられ、死んでおるはずじゃった。」

「……そう、じゃが生きておる。運命が変わってしまったのじや。おぬしの影響での。」

「……ああ、別に怒っておるわけではない、驚いてはいたがの。」

「本来運命は人間にはそうそう変えられぬものなのじゃ。たとえ命を懸けたとしても。」

「これは絶対の法則じゃった。……おぬしの事例を除いての。」

「確かに運命は不変のものではない。」

「じゃが、もし運命を変えようとすれば、とても大きなえねるぎーが必要となる。」

「そのえねるぎーは人間一人の命程度ではとても賄いきれるものではない。」

「極々まれに大きなえねるぎーの魂をを持って生まれる者もある。」

「歴史に名を残す英雄たちじゃの。」

「運命を変えるならば、そのようなある種の先天的な能力を持つ者が、多くの人々を率い、立ち向かってゆく必要がある。そこまでしてやっと可能性が見えてくる程度じゃがの。」

「無論おぬしにはそんな才能はない。確かじゃ。何度も調べたからの。」

「もともとそうほいほい出てくるような能力ではないからのう。次に出てくるのは何十年、何百年先じゃろうかの。」

「じゃがおぬしは、その法則を覆しおった。」

「死ぬはずじゃった命を、自分の命一つですくいおった。」

「これは英雄でもなかなかできることではない。 それほどのことじゃ。」

「それ故に、僕はおぬしにとっても興味を持った。」

「じゃからの、おぬし、……転生してみんか？」

「転生？」

「そうじゃ、転生、生まれ変わりともいうかの。」

いきなりあらわれて変なことを言い続けた爺さん（自称神）が、さらにわけのわからんことを言い出した。

「なんでそんなことをしなければならぬ？ さっさと天国なり地獄なりに送ればいいだろう？」

「まあそれでもいいんじやが、おぬしのような存在に前例がなく
ての、下手に運ぶと何が起こるかかわからんのじやよ。 それに個人
的におぬしに興味を持っておる者もおつての、まあ僕はその一人じ
やが。」

ともあれ、何が起るかわからんのならば、もっと観察しようということになっての、じゃからおぬしをどこか別の世界へ転生という形で送り込もうと思ったんじゃない」

「……突拍子がなさ過ぎて訳が分からないが、まあご老体の言いたいことは分かった。要するに私という存在が世界にどのような影響を与えるのか実験してみよう、ということか」

「うむ、そんな感じじゃ」

「……ところで、ここは私たちの世界で言うあの世、というもののだね？ それにしてはらしくないな。どう見ても少し殺風景な和室でしかない」

「ふむ、もともとこの場所には決まった形というものがないので、とりあえずおぬしが落ち着きそうな形にしてみたのじゃが、違和感があるならもっとわかりやすくしようかの？ ……ほれ！」

そついいながら爺さんがいきなり手をたたいた。

するといきなり座っていた畳が水に浮かぶ大きな蓮の葉になり、辺りは見渡す限りの蓮の花だらけになり、空には天女が天使と踊っており、少し離れた蓮の葉の上ではキリストと釈迦らしき人物が朗らかに談笑していて、そこに天照大御神らしき女性も加わりさらにぎやかになっていった。

「……いろいろ突っ込みどころはあるが、とりあえず混ざりすぎだ。とりあえずさっきの場所に戻してくれ。こんな混沌とした場所では落ち着けない」

「そうかの、あいわかった。では」

また爺さんが手をたたくと、周囲の風景は先ほどの和室に戻った。

「さて、これで儂が神だと信じてもらえたかの？」

「……なぜ私が疑っているの？」

「そんなもん、おぬしの心を読んだからに決まっておろつに。」

「……なるほど。確かに今ので疑いはだいぶ薄まった。あなたを神だと認めてもいい」

「ほつ、そうかの。それはよかった」

「それで、私はこれから何をすればいい？」

「転生してくれるのかの？」

「別にかまわない。なかなかできん体験ではあるからな」

「そうか、ありがたいの。では、今回の実験について話して行く
「そうかの」

プロローグ 3 (前書き)

プロローグ 最後です。

では、さようなら。

プロローグ 3

「ではとりあえず、転生するに当たりいくつか説明することと決めておくことがある。

まず一つ、転生先はおぬしの世界にあつたある物語の世界をベ―すにした世界になること。

二つ目に、その世界では何をやってもよいものとする。基本的に今回の話はおぬしが世界にどのような影響を及ぼすか確かめるためのものじゃからの。たとえ本来の物語から大きく外れてもいのように世界を作ったので、世界そのものを壊さない限り、何をしてもお―けーじゃ。

三つ目に、今回の実験に期間はない。おぬしには不老不死に傷の自動修復機能も付けられることになる。じゃから好きなだけ新しい世界を楽しんできて良いぞ。本来おぬしにはする必要のない事をさせているわけじゃしの。これくらいはさーびすじゃ。やめたくなつたらそう願えばいい。そうすれば実験は終了し、おぬしを普通の魂と同じように扱うことを約束しよう。

四つ目に、これから行く世界には、今までの体と名前は持つては行けぬのでな。新しい姿と名前を決めてもらいたいんじゃ。

そしてこれが最後じゃが、おぬしには転生するに当たり、願いを三つかなえてもらえる権利を持つ。新しい世界に備えるため、いろいろ必要なものをそろえるためのものじゃ。よく考えて決めなさい。

さて、説明はざっとこんなもんじゃが、何か質問はあるかの？」

「私が行くことになる世界とは何の物語をベースにしているんだ？」

「まあ、儂らも何でもよかつたのでな、とりあえずおぬしが生前

読んでおつたものの中から適当に選んでおいたぞ。 えーと、……魔法先生ネギまとという物語をベースにした世界じゃ」

「ほう、あの物語かね。 それはまた興味深い……。 では次の質問だ。 三つ願いをかなえろといったが、どんな願いでもいいのか？」

「ああ、構わんぞ。 さすがに『転生したくない』とか、『自分も神にしる』とか言うのは無理じゃがな。 きちんと転生してくれるなら、たいていの願いは叶えてやれるぞ」

「……転生と言うと、新しい命として赤ん坊からやり直すことになるのかね？」

「いや、その世界にいきなりあらわれた、という形を取ってもらう。 おぬしはその世界の構成物ではなく、あくまでいれぎゅうとして動いてもらうことになるからの、おぬしの意図に反したつなかりは極力避けねばらんのじゃ」

「……なるほど。 では転生する時間と場所は指定できるのか？」

「できる。 その指定がなければ原作開始時に放り出すつもりじやったからの。 希望があるなら叶えよう。 無論原作より未来、というのは遠慮してほしいがの。 ああ、この指定は三つの願いとは別に扱われるからの、願いの数が減ることはないから安心せい」

「……ふむ。 大体分かった。 質問はそのくらいだ」

「そうか。 では早速、準備に入ろうかの。 ではまず姿の設定じゃ。 なりたい姿を想像せい」

「わかった。……………こんな感じでどうだ？」

「ふむ、これでよいのか？ では変えるぞ」

神がそういつた瞬間、私の体は大きく揺れた。

だがその揺れもすぐに終わり、その時にはもう私は私ではなくなっていた。

神はどこからか出してきた姿見をこちらに向け、

「どうじゃ？ 希望通りになっておるか？」

そこに映るのは、背丈は大学生ほど、サイドに白髪の一筋入ったオールバックの鋭い視線を持つ顔だった。

「うむ。想像通りだ。素晴らしい」

「ほっほっほ、それはよかった。では次に、名前を決めてもらおうかの。その姿で、おぬしはなんとなる？」

「ふむ、ではこの姿の持ち主から名前も頂こうか。いいゲン担ぎになるだろう。私はこれから、『ミコト』と名乗ることにする。苗字はないほうが楽だし、漢字は理解できない者もいるだろうからな。カタカナ三文字で『ミコト』だ」

「……………よし。登録完了じゃ。ではミコトよ、願いを三つ言っ
がよい」

「まず一つ、私の気と魔力を、これから行く世界においての最高クラスにしてほしい」

「ほっほっほ、構わんよ。その願い、聞き届けよう。」

「二つ目は、私に、能力を作る能力を与えてくれ」

「ほっ！ ずいぶんちーとな能力じゃのう。何でもできてしま
うではないか。……まあ良い、その願い、聞き届けよう。」

「では最後に、……私が今までいた世界において、私の存在のみ
を消してくれ」

「ほ……？ どういうことじゃ？」

「私が死んだことで悲しむものや困るものがあるのは忍びない。
私が生きてきたことの結果だけは残し、私の存在を完璧に消してく
れ。それができなければ、あの世界にいる誰かにかたがわりして
もらってもいい。とにかく私の存在をなかったことにしてくれ」

「……本当にいいかの？ 辛くはないか？」

「私はあの世界ではもう死んでいる。今更戻れないなら、いな
かったことにしたほうがあの世界の私の関係者はもちろん、私自身
も気が楽だ。彼らの悲しむ顔を想像しなくてもよくなるのだから
ね」

「……そうか、わかった。その願い、聞き届けよう。」

「……では最後に、行きたい場所と時間を指定しなさい」

「場所は誰も入ってこれない森の奥深く。時間は原作開始の七
百年前で頼む。不老不死ならば、百年位はゆっくり修行して、力

をつけてからゆっくり世界を回るのもいいだろう」

「そうか、わかった。おぬしの希望を聞き届けよう。ついでに向こうでできるろーぶもくれてやるう。おぬしが想像した姿はすーつを着ておったが、おぬしが希望していた時代にすーつはないから。」

……さて、これで前準備は終了じゃ。あとはもう、新たな世界へ旅立っただけじゃ。何か聞きたいことは有るかの？」

「……いや、もうない。これで十分だ」

「そうか。では……。ふん!!」

神はいきなり、足元の畳を平手でたたく。

すると、あんなにぴっちりハマっていた畳が一枚起き上がりその下を見せる。

そこを覗き込んでみると、ちょうど畳一畳分の穴が開いており、下に降りるための階段が暗闇の奥底まで続いているのが見えた。

「ここをずっと降りていけば、おぬしが希望した誰も人が寄り付かぬ森に出られるぞ。中は暗いからな、これを持って行け」

神はそういって、松明を手渡してきた。

「ああ、わかった。何から何まで世話になったな、神よ」

「結局おぬしは最初から最後までそのしゃべり方か。少しは儂を尊敬したらどうじゃ？」

「何を言う。尊敬しているとも。私のわがままをすべて聞い

てくれた者だぞ、尊敬しないはずがないではないか。私はそれが表に出づらいただよ」

「左様か。……まあ、気を付けてな」

「ああ。次に合うのは私が生きるのに飽きた時になるのか。では、もう二度とあなたに合わないことを祈ろう、ご老体」

「ああ、せいぜい楽しんでくるとよい」

「では、さらばだ、おせっかい焼きの神よ」

「二度と来るな、意地っ張りの不思議人間」

そういつて笑った神を見て、私は階段を下りて行った。

これからの世界が楽しいものであることを期待しながら……。

プロローグ 3 (後書き)

主人公の容姿は、終わりのクロニクルの佐山御言がローブを着ている姿を想像してください。

さて、始めりました創造王の遊び場。

今作は、私の初連載作品でありながら、構想を全く練っていない行き当たりばったりもいいところな作品です。

そのところも温かい目で見ながら、なかなか出てこない続きを待っていてくださいませ。

次の話は、主人公が神からもらったチート能力を確かめたりする話の予定です。

いろいろ甘いところなどあると思いますので、誤字脱字感想など、ガンガン寄せていただければ幸いです。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

P S

12月9日に神の台詞を修正しました。

神は基本的にカタカナを使いません。

さらに1月3日にプロローグ全体の神のセリフを修正。

これにより「ミコト」以外はカタカナがなくなったと思います。

読みにくいとは思いますが、これもキャラの内と楽しんでいただけ

ねば幸いです。

第一話（前書き）

頑張りました。

小説情報を見てみたら、お気に入りかもう三件も。

しかも感想までいただいていたしまいました。

これはもう頑張るしかありませんね！

それではこの場をお借りして、感想を頂いた竜華零様へお礼の言葉を。

大変丁寧な感想をありがとうございます。

その言葉だけで頑張ってくださいませ。

そして、このような返事の仕方です。申し訳ありません。

さてそれでは、創造王の遊び場 第一話、始まります。

第一話

気がついたら森の中に立っていた。

神に言われた通り、先程まで暗い下り階段を松明を頼りに下りていたが、10分ほど下り続けると明かりが見えてきた。

光り輝く出口を抜けると眩しさに目が眩み、目が慣れてみると周りには見渡す限りの緑が広がっており、生い茂っている樹木のせいで空もろくに見えない。まさに樹海とも言える場所だった。

背後を見ても、階段どころか出入り口もない。

階段を抜けるとそこは森だった、か。ふむ、私に文学の才能はなさそうだな。

苦笑しながらあたりを観察するも、神が願いを叶えてくれたのだろう、人の気配はない。

さて、転生というものをしてはみたものの、これからどうしたものか。……もらった能力の訓練をするにしても、ひとまず拠点を探さねばならんかな。さしあたり木の洞や洞窟等が定番か。

そんなことを考えながら適当な方向へ歩きだす。

しばらく歩くと少し開けた場所が見えた。大きな木が倒れているところを見るに、どうやら大木が寿命を迎えて倒れてしまい、ぽっ

かりとできた隙間のようだ。

やっと空をまともに見ることができ、なぜか安心してくる。

転生なんて経験をして、太陽の下に生きる生物は日の光からは縁が切れないのか。

そんなことを考えながら見上げた空には雲一つなく、そんな空模様も相まって、なんだか柄にもないことを考えていた自分が可笑しくなってくる。

もらった能力を確かめるためにも集中できる場所が必要だ。

こんな深い森だ、人が来る心配はないだろうが、猛獣の一匹や二匹いてもおかしくない。何か来ても入り口をふさいで籠城できる洞窟か、敵を早く見つけられる小高い丘、あるいは開けた場所が適している。ここなら広さも十分だね。とりあえずここを暫定的な訓練所としようか。

大きな切り株を中心にした空間は、地中に潜る根のせいかとどこどころデコボコはあるが、それさえ気にしなければ天然の芝生の生えた広場だ。

中心まで歩いていき、ロープを脱いだミコトは、自分の体を確かめる。

「スーツ姿か。確かにこの姿にはあっているが、この時代には前衛的すぎるな。何かこの時代に合った服を考えなくては」

スーツがある程度着られるようになるのは18世紀辺りからのはずなので、指定した年代に送られたのなら今は14世紀。場違い

もいところだ。

「かといってローブ姿でも怪しいな。人前に出るためにも何とかしなければな。」

まあそれはおいおい考えるところ。まずは今できる事の確認と行こう。あのおせつかい焼きのことだ、おそらくは……、あった」

歩いている途中から気になっていたローブについている内ポケットの違和感。落ち着いた場所につくまで見ないで置いたそれを確かめると、封筒入りの手紙があった。開けてみるとそこには、

『この手紙を見ているということは、僕はもうおぬしの前にはいないのじゃろっ』

「……あなたがこの世界に送り出したんだから当然だろうが。何で自分が死んでいるような文面なんだ……？」

『とまあ冗談はさておき、この手紙にはおぬしの現状と能力の使い方を記してある。』

よく読んで覚えておくように。テストに出るぞ！』

「何のテストだいたい。全くなんでこんな無駄な文章を……」

『まあ、人生には多少の遊び心も必要じゃて』

本当に破り捨てたくなってきた。だがまあ情報収集は大事なことで読み進めていくと一枚目はほとんどがふざけた内容で、大事なことはあまり書いていなかった。便せん三枚の内一枚を無駄にした神は滅べばいい。紙様の怒りを知れ！

ともあれ二枚目に取り掛かることにする。

『これ以上ふざけるのはさすがにまずいので、本題に入ろうかの』
だつたら最初からふざけず真面目にやれ。

『さつそく能力の使い方じゃが、魔力と気の方はこの世界の者に聞いて修行したほうが良いじゃろう。言葉で説明しても体で覚えなければ意味がないからのう』

「まあ、それはもとよりそのつもりだが。この場合は知識よりも経験の方が大事だからな。まあ百年も研鑽をつめば何とかなるだろう」

『それに関連して肉体のことじゃが、不老不死になっておる。
今の姿は大体18歳ぐらいじゃが、それ以上年を取ることはない。
永遠の思春期じゃな』

うるさい黙れ。

『また、それに伴い、どんな怪我でも一瞬で元に戻るようになっている。この蘇生に魔力、気は必要ない。儂からのさーびすじや。おまけに戻るのには怪我をした一瞬前の状態にじゃから、それまでの訓練の成果が消えることはない。まあ治癒能力のすごいものと考えてくれればよい』

「魔力と気が消費されないのは助かるな。いざという時に回復できなくては意味がない」

『また、気と魔力じゃが、今のままでも最強クラスじゃ。じゃが、訓練次第でさらに上げること可能じゃ。特に上限は設けておらんから、好きなだけ強くなるとよいじゃろう』

「上限なしか、鍛えがいがあるな。これは楽しみだ」

『そして最後に、おぬしの希望した【能力を作る能力】の使い方じゃが、こんな能力を作りたいと考えるだけでよい。その通りの能力を習得できる。作れる数に限界などないので、好きなだけ作るがよい』

「なんだ、ずいぶん簡単だな」

『じゃが、そのように作った能力は、あくまで思い浮かべたことだけしかできん。切り傷を治す能力ならやけどにはきかんし、速く走る能力なら速く泳ぐことはできん。まあ水の上ぐらいなら走れるかもしれんが』

「きちんと細部まで設定しないと不完全なものが出来上がるのか。これに関しては繰り返しやっていくしかないか」

『あと、この能力に関しては制限をかけさせてもらった。制限の内容は、【死者の蘇生と対象の単純な無敵化は行えない】というものじゃ。あまりにも強力すぎるからう。じゃからいろいろな能力を使って無敵に近付くのは可能じゃ。まあ能力の説明はこんなところじゃな』

「まあもともと死者の蘇生はするつもりもなかったが……、無敵化はできるのか。いろいろ試行錯誤が必要だな」

そこで二枚目が終わっていたので、三枚目を見る前に、さっそく能力を使ってみることにした。

「一番最初に作るべきは索敵能力だろうな。いくら強力な能力を作っても、使う前に攻撃されたら終わりだしな」

そう考えて能力作成を始める。

「対象は人間と大型の動物全般。半径500メートル以内の対象すべてと半径5キロメートル以内の害意を持つ者を察知する能力。……ああ、あと半径100メートル以内の武器とその一部、さらに魔法や気弾、トラップにも反応するように……っと。こんなところでもいいだろうか」

こうしておけば大体の危険には反応できる。武器とその一部も対象にしたから狙撃用の弾丸にも反応できる。回避方法も後々必要になるだろうが、

「ひとまずテストしてみるか」

作ったばかりの能力を発動すると、神は本当に丁寧に願いをかなえてくれたらしく、範囲内には人間は一人もいなかった。その代り……

「なんだ……？ この大きな反応は？」

大きな、おそらく動物の反応がここから400メートルほどのところにある。

体長がかなりでかい。

でかいといってもゾウ程度ではない。その数倍の大きさの生物が、こちらにだんだん向かってくる。

「この地球上にゾウより大きな陸上生物は存在しないはずだが……いきなり不具合かね？」

だが、何度調節しても結果は変わらず、それどころかどんどん近付いてくる。

しかもなんだか空気が揺れている気がする。

まるで何か大きなモノがこちらに飛んできているように。

「そういえば、まだ手紙には続きがあったね」

現実逃避気味に手紙の三枚目を見ると、

『最後におぬしの現状を教えておこう。実は「誰も入ってこれない森の奥深く」という条件をくりあする場所が地球上になくてのう』

なんだかとても不吉なことが書いてある気がする。

『じゃからおぬしを魔法世界の森の中へ送り込むことにしたんじや。地球とは違って大型の危険生物がたくさんおるからの、注意するんじやぞ』

……魔法世界？ 大型の危険生物？ ……まさか

『でもまあ、げーむ好きにはたまらんじやろうの、なんせ本物に

遭遇できるからの』

……本物？ 何の？

その答えを読むのと同時に、広場全体に影が差した。

ちょうど大きな反応も自分のこの広場の上空にある。そしてそのまま、

《ズシン！！》

という音と共に地面が揺れる。

その原因を見たと同時に、先ほど読んだばかりの言葉がよみがえる。

『おぬし、ドラゴンは好きかの？』

そして私は足が速くなる能力を急いで作り、ふざけたことをしてくれた神を呪いながら、ロープをつかみ走り出す。

後ろに体長15メートルほどの翼付きの巨大なトカゲを伴って。

結局この日は逃走劇に終始した。

第一話（後書き）

今回は新世界に到着したミコトの様子とスペックの説明、そして初めて的能力使用と受難を、神様（紙様？）との漫才を挟みつつお送りしました。

次回はさらなる能力な開発と、それを有効に使ってみよう！ というお話……のはずです。

ある程度の話のアイデアは頭の中にあるので、学業の合間を縫って執筆、投稿したいと思います。

いろいろと変なところがあると思いますので感想で指摘していただければ幸いです。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第二話（前書き）

初めての予約投稿です。

まあ、いつも通りの駄文ですが。

今回、後半は自分でもどうしようか迷った部分です。

この主人公には合わないかとも思ったのですが、

この機を逃すとこんなことはもうできなさそうですし。

まあそんなこんなで、

創造王の遊び場 第二話、始まります。

第二話

いきなり遭遇したドラゴンから何とか逃げ切り、へとへとになった所に調度良い大きさの洞窟があったので、索敵能力を使い安全を確認したあと、中に入って休むことにした。

中に入ってみると、洞窟と言っても精々奥行きが10メートルほどの小さなものだった。

とりあえずドラゴンから逃げるために急いで作った幻術能力（相手に思い通りの幻覚を見せるもの。視覚だけでなく、猛獣用に五感全てと探查魔法、気配察知もごまかせる優れもの）を使って出入口を普通の岩肌に見えるようにしたあと、念のために索敵能力を使ったまま、読み掛けだった手紙の三枚目に目を向ける。

『まあ、そちらは地球よりもやんちゃなモノ達が多いから、気を付けた方がよいぞ？』

「この文章を最初に持ってくれば良いものを。ご老体め、狙っていたんじゃ有るまいな？」

『地球に渡る方法は、まあ教えなくとも良いじゃろう。おぬしの能力なら簡単に移動できるじゃろうしの。』

「確かに、世界間移動用の能力を作れば良いだけだからな」

『それと、戦闘になったときの注意事項じゃが、攻撃を受けた時傷ついてもお前の体はすぐに回復するが、おぬしの身に着けているものは壊れたままじゃ。 気に入っているあくせさりーや服が壊れ

た場合は元に戻らんから気を付けるんじゃないぞ?」

「まあ、身に着けるものは私の一部じゃないからな」

『そこで、今おぬしが着ておるろーぶとすーつには自己修復機能を付けておいたからの。これで破れても大丈夫じゃ。無論汚れもつかんから選択の手間が省ける。これは便利!』

「どこのテレビショッピングかねいつたい。まあ助かるが」

『これで男の半裸という一部の好事家しか喜ばん罰ゲーム映像を誰も見ないで済むぞ。よかったのう』

「大きなお世話だクソジジイ」

『さて、とりあえず説明はここで終わりじゃ。後はおぬしで何とかするんじゃないぞ?』

「まあ、細かい事は自分の目で確かめるべきだろうな」

『手紙とは言え、おぬしに次に会えるのは当分先になるじゃろう。おそらくおぬしが死んだときじゃ。その時にでも、おぬしの思い出話を聞かせてくれるとうれしいのう』

「その機会が訪れるのは当分先になると思うがね。まあその時になったら、飽きるほど聞かせてやろうじゃないか」

『そろそろお別れじゃ。名残惜しいがそろそろ筆を置こうと思う。おぬしに退屈無き生があらん事を祈るぞ。では、さらばじゃ』

「神が何に祈ると言つのかね……。まあご利益はありそうだが」

『P・S』

「……ん？」

『この手紙は読み終わると自動的にあたりを巻き込んで消滅する』

「……なにやっているのかねあのジジイは!？」

急いで丸めた手紙を洞窟の外に投げ捨てる。

その後自分もすぐに洞窟の一番奥に避難するが……、

「なにも……起こる様子は無いね？」

恐る恐る手紙に近付き、拾い上げて広げ直し確かめると、先程の文章の後に小さく、

『ようにしようと思ったんじゃが、面倒なので何も仕込んでおらん。おぬしが自分で燃やしてくれい。それでは、健闘を祈る』

「……妙なネタを仕込んでいるではないかあのジジイ、今度会ったら一発殴つてやらねばなるまい」

そう心に決めて、手紙を封筒にしまつて燃や……さず、ローブに

しまつ。

「……得たつなかりを少しでもとどめておきたいか……。我ながら女々しいものだね。」

私に感傷は似合わんだろうが、まあこれぐらいはいいだろう」「沈みそうな心を何とか奮い立たせようとする。」

「さて、まずは手札を増やそうか」

これからのことを考え、対策を考えていく。

「手始めに身を守る手段だな。戦う手段はともかく、まずは身を守らなくてはならん。身を守る能力、それを訓練する時間、安全な隠れ家……。用意するものは山ほどあるな」

そうすることで、未来まえを見ることで、過去うしろを見ないようにする。

「とりあえずは隠れ家か。安全対策を講じている間に襲われてはたまらんからな。私以外は誰も入れず、迷い込むことすらできん、完璧な隠れ家を作って見せよう!」

前の一点のみを睨み付け、わき目も振らず進んでゆく。

「そのためにもどんな能力がいいか、考えなければな」

だが、それでも。

「能力。能力が……」

人間の視界は広い。前だけ見ているつもりでも、いつの間にか目の端に過去が飛び込んでくる。

「能力……。能力だ。私が考え、作り出す能力。それでも、この力は神からのもらい物、……いや、借り物だ」

取り繕った心は、何かの拍子で、簡単に沈み込む。

「借り物の力で自分を守る。なんと滑稽な話だろうか」

過去と向き合わない心は、いとも簡単にへし折れる。

「能力も、気も、魔力も、体も、顔も、名前さえも、何もかもが、もともとは私の者でない借り物だ」

彼は笑う。

「私は借り物の力を自分の者のように扱い、偽物の自分を作っているただの案山^{かかし}子だ。借り物で構成された、こけおどししかできん偽物だ」

人からもらったものでしか自分を守れない自分をあざ笑う。

だが、心が折れても、それでもきちんとして過去を見据え、どん底から這い上がってくれば、

「だが、こんな偽物の私でも、この魂だけは本物だ」

自分の持つ唯一の本物を守るために。

「ならば私は、この魂だけは守り抜く。誰に何と晒われようと、ののしられようと、この魂を守るためならば借り物だろうと偽物だろうと何でも使っても使ってもやろう!」

そんな誰にも折れぬ信念を抱えて這い上がってきた心は、もう折れることはない。

「泥にまみれようが、傷つこうが、何があるうと意地汚く進んでやろう!」

汚れを嫌う大人など知ったことではないと、開き直った子供のよううに。

「この世界を、自分勝手に楽しんで見せよう!」

泥遊びをして泥だらけになり、そんな自分を笑う子供のよううに。

「その、私だけの望みを叶え、魂の欲するものを手にしたとき!」

そして、そんな自分を誇るよううに。

「本物の願いをかなえた私は、本物となるだろう!」

宣言する。

「ならば私は、この世界を、私の遊び場とする!」

自分勝手な物言いを、自分勝手に正当化して。

「遊び場で遊んで、遊びつくして、最後の最後まで笑ってやる!」

世界に対して、自分の魂の叫びを響かせる。

「さあ、これが私からの初めましての挨拶だ！ この挨拶をきいたからには……、」

世界を、自分の思い通りの遊び場に変えるように。

「さよならの挨拶を言うまで、逃げることは許さんぞ！」

「さあ、何して遊ぼうか？」

第二話（後書き）

と言う訳で、第二話でした。

前半漫才で後半は主人公の鬱状態と自分勝手な宣言です。

まあ、転生したてで、本当に一人になってしまったんなら情緒不安定にもなるかなあ、と。

それに、転生チート能力モノって、もらい物の能力で偉そうに好き勝手するのってどうなのかなあって、読んだり書いたりしているうちに思ってきてしまったのも事実ですし。

まあ、本家の佐山さんも結構不安定で自分勝手なトコがあるしいいかな、と理論武装したうえで暴拳です。

意見のある奴あ、感想でもドシドシ送ってきやがれ！ って感じですよ。

文句のある人には、これがうちのミコト君です！ って言い張ってから土下座ですね。

ホント、土下座何回で許してもらえるんだろう……？

まあ、そんなわけで、いつも通り誤字・脱字報告、感想・ご意見何でもお待ちしておりますので。

次回の予定としては、準備期間として20年ぐらいキンクリしてから旅に出たり修行したり商売したりすると思います。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第三話（前書き）

結構ポンプン書けるもんですね。

まあ、今だけでしょうが。

そんなわけで更新です。

ちなみに、三話と四話で一つのお話になってます。

それではさっそく行ってみましょう。

創造王の遊び場 第三話 始まります。

第三話

私がこの世界に来てから二十数年がたった。

その間、私は魔法世界の各地を転々としていた。

理由は、強者と出会い、教えを乞うこと。

山奥や森の奥深くでひっそりと暮らしている武術家や魔道士と出会い、弟子入りのまねごとをする、あるいは戦って技を盗む。

そんなことを繰り返していた。

索敵能力を使って持っている気や魔力が高い者たちを探せばわりと簡単に見つかるし、習得速度が速くなる能力を作ったので盗むのもわりと楽だった。

どんな技も簡単に会得してしまうので、自信を無くす強者たちを量産してしまっただけからは、少しは自重することにしたが。

出会う強者の大半は世捨て人だったので、私のことが噂になることも少なかった。

その合間を縫っては各地の町で、村で、自作の魔法具を売って歩いた。

魔法具と言ってもすべてが防御にしか使えない物だ。

所有者を襲う攻撃を防ぐ、あるいは傷ついた者を回復する。

そんなものばかりを売って歩いた。

自分の作ったものが、人を傷つける道具にされるのはごめんだったから。

売るときには道化のような仮面をかぶっているので目立つし、買おうとする人に『人を傷つけるためには使わず、身を守るために使ってほしい』とお願いしているため、噂になるのも早かった。

道具作成能力と、概念貼り付け能力をフルに使ったおかげで、性能は最高級であり、美術的価値も高いものとなり、しかもわりと低い値段で売ったため、そこそこ有名になってからはかなり売れるようになった。

客のほとんどは近くの村に住み、盗賊などの脅威におびえているものや、強盗を恐れる旅の商人、医療関係者だった。

売り始めてから二、三年もたつ頃には、自作の魔道具を売って歩く仮面の男としてかなり有名になっていくらしく、最近では創造王^{メイキング}などと呼ばれているようで、どこへ行っても仮面をつけて街を歩くだけで、声をかけられ、商談が始まるようになった。

普通の人には作り出せないような高等な魔法具を大量に作り出し、売り歩くことから名づけられたらしい。

それがそのままブランド名となることもあるようで、ある商人同士の話で、

『見るよ、^{メイキング}創造王の本物だぜ！』

などと自慢している姿を偶に目にするようになった。

だが、大抵の場合は、購入時に交わされる約束や、使用者を設定するときに行う契約めいた儀式（魔法具のどこかについた寶石に使用者の血液を垂らす）、さらには、使用時に魔法具のどこかに現れる（魔力を通したときに浮かび上がる）光の文字『testament』にちなんで、テストメントと呼ばれることが多いようだ。

この『testament』の文字には私にしか行えないような細工がしてある。

これにより、見るものが見れば真贋が判断できるようになっており、この文字が、私の作品の特徴とされるようになるまで、そういう時間はかからなかった。

さらにこの文字には秘密の術式が仕込まれている。

この術式は、私が設定した状況になった場合にのみ発動するものであり、『testament』の文字と共にすべての作品に刻み込まれている。

この術式を解除すると魔法具の効果もなくなるので、はずすこともはずすことはできない。

まあ、普通に生活していればまず発動することはないので、ほとんどの者には知られていないが。

『武者修行の男』とは違い、^{メイキング}『創造王』の知名度は高く、売り始

めてから20年ほどたった今では、魔法世界に知らぬ者はいない、とされるようになった。

そんなある日のこと。

ある町を仮面にローブといういつもの格好で歩いていると、いつものように住人に呼び止められ、商談をしていると、いつの間にか数人の武装した男たちに取り囲まれた。

どうやら兵士のようで、今日に客の中に犯罪者でもいるのか、などと考えていると、客は全員商談を中止して逃げて行ってしまった。

それでもなお兵士たちが離れていかないと見ると、狙いは私か、私の持っているものであり、十中八九後者であろう。

そんなことを考えていると、兵士の一人に呼びかけられた。

「貴様、『メイキング創造王』だな!？」

「そのように呼ぶものもいるようだ。……自分から名乗ったことではないがな」

今私がかぶっている仮面には軽い認識阻害（仮面しか印象に残らないようにする）とともに変声効果も付随されているので、中年の男のような低くもはっきりした声であり、口調もそれに合うようにしている。

ちなみに、仮面をつけ始めた時は若い男の声になるようにしてい

た。それから5年ごとにだんだん声を年を取ったように変えていったので、年を取っていないことはばれていない。

私の答えを聞くとその男はそうか、と言い、

「このあたりを収める領主様がお待ちだ、ついてこい！」

と言い放った。

「ふむ、何の御用で？」

「ついてくればわかる。とにかくこい！ 領主様を待たせるな

！」

……この兵士に聞いても無駄なようだね。

一瞬逃げることも考えたが、

……まあ、この程度の者たちからならばいつでも逃げられるね。

と思い直し、ついていくことにした。

今いる町はかなり大きな町であり、一人の領主がまとめている。

その様子は、認められていないだけで、もはや国ともいえるほどになっている。

だが、今は十分な大きさの町であるが、100年も前は小さな村

であったようだ。

その村が盗賊などの被害から身を守るために近隣の村と協力し村の規模を大きくした。

それに伴い、その近くの村、またその近くの村と、大きな木の下に集まるようにどんどん協力してくる村が集まってきた。

組織の規模が大きくなれば、それをまとめるリーダーが必要になってくる。

その村でも例外ではなく、最初に協力の話を出した村の長がリーダーの座に収まった。

そのリーダーは頭がよく、さまざまなことを考え、実行に移した。

それぞれの村から男たちを集め、鍛え、町の警護につかせた。

いろいろものを知っている老人たちを教師とした簡単な学校のよ
うなものを取り決めた。

税金の制度を作り、その税により学校の建物を作り、多くの子どもたちの教育をした。

それぞれの町にいた医者と他から呼び寄せた医者と知識の共有を
図り、医療を充実させた。

鍛え上げた男たちを組織して、このあたりを根城にしていた盗賊
集団を殲滅した。

そのほかにもさまざまなことをして、村を発展させていった。

その結果、村は平和に、豊かになった。

だが、その優秀な長も亡くなり、その息子が二代目の長となり、しばらくすると人口が膨れ上がり、村では抱えきれなくなった。

二代目の長は少々気性が荒い人物だったようで、『狭いならば広げればいい。そこに住んでいるものがいても構わない。奪い取ってしまえばいい』と考え、盗賊を退治しても、有事の際に備えて訓練を続けていた男たちを兵士として組織し直し、さらにそれ以外の男たちも徴兵して、武力によって領地を広げていった。

最初は躊躇していた村のほかの者も、豊かになっていく生活に、取りつかれていった。

そうして蹂躪と発展を繰り返し、世代が変わり、三代目の長になるころには、今と同じくらい領土を持っていた。

必然的に長を領主とした年のようなものが出来上がっていった。

三代目は穏やかな人物で、領土を外へ広げることよりも、領土の中をより豊かにすることを考え、近隣の領主たちと同盟を結び、これ以上戦いのない生活を目指そうとした。

その考えはうまくいき、領地は発展し続け、近隣の領主とも良い関係が持たれていった。

だが、四代目、つまり今の領主はまた気性の荒い人物になり、また時期悪くこのあたりを日照りが襲った。

今までの備蓄があるため、すぐにどうこうなりはしないが、このままではダメなのは誰が見ても明らかだった。

そして今の領主はその気性故、領地内で何とかやりくりするよりも、近隣の領土から奪ったほうが良いと考え、兵の準備をしているらしい。

これがこの町の歴史と、近隣の町やこの町の住民から聞いた噂であつた。

そして今、、『^{メイキング}創造王』と呼ばれる自分が呼ばれたのならば、その狙いはおそらくは……。

そんなことを考えている間に、一行はこのあたりでは一番大きな建物にたどり着いた。

兵士に促され建物に入り、導かれるままに大きく立派な扉の前にとどり着いた。

そのまま兵士は扉をたたき、

「領主様、、『^{メイキング}創造王』殿をお連れしました」

「うむ、入れ」

中に向かって声をかけた兵士に、中年男性の重苦しい声が返事をした。

その言葉に、兵士は扉を開きながら、

「入れ。粗相のないようにな」

今まで無礼な態度だった兵士のその言葉に少々腹が立ったので、

「ああ、少なくとも君よりは礼儀を心得ているとも」

と返し、眉を寄せた兵士を尻目に、扉の向こうに進んでいった。

第三話（後書き）

と言う訳で、第三話でした。

まあ、なんとなく先の展開が読めてきてしまいましたが、まあそこはご容赦ください。

私の文才ではこんなものです。

とりあえず、時代考証がおかしいという突っ込みは、魔法世界だから、ということ回避させていただきます。

いえね、社会科学系の教科苦手だったんですよ。

高校でも理系コースだったので授業は実質免除されてましたし。

まあそんなわけで、こんな駄文をこれからも量産していくつもりです。温かい目でご覧ください。

誤字脱字報告、感想意見、なんでも募集しておりますので、ドシドシお寄せください。

ログインなしでもできるようになっていくはずなので。

今回はこのお話の続きです。

まあ、内容としては、わかりやすく悪を滅ぼします。

そんな感じですよ。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第四話（前書き）

前回の続きです。

今回は少々長くなりました。

さらに、書く時間があまり取れずに、学校のパソコンで投稿する
とに……。

頭の中にはアイデアがあるのに、それを表に出す時間と才能がない。

かなり悔しいですね。

そんな作者の言い訳を聞きながら。

今日も駄文をお楽しみください。

そんなこんなで、

創造王の遊び場 第四話、始まります。

第四話

扉の向こうには小さな家の敷地ほどの部屋があり、その部屋の真ん中にある大きく立派な机に豪華な服を着た中年男性が座っていた。

この部屋もまた豪華であり、敷物から壁にかかっている絵画まで、この町の一般人には手の届かなそうなものばかりだった。

その部屋の主であろうその男も肥え太っており、日ごろの生活がうかがえる。

そんなことを思っていると、その男が声を上げた。

「貴様が、噂に聞いた魔法具職人、『メイキング創造王』だな？」

「あなた様の部下の方にも申し上げました通り、私自身そのような名を名乗ったことは有りませんが、そのように呼ばれていることも事実であります、領主様。それで、本日はどのようなご用件でしょうか？」

「うむ、その前に貴様、我が前で失礼であろう、そのふざけた面を外さぬか」

「申し訳ありませんが、これは自身の起こした不始末により醜くなった素顔を隠すものです。領主様の気を悪くするのは忍びなくございます」

無論嘘だが、このような噂が広まっているのも本当のことだ。なるべく素顔を隠しておきたい以上、そのようなことを言っておけ

ば安心だろう。

案の定、領主は素顔への関心を無くしたらしく、

「まあ良い。早速だが、ここに呼んだ訳を話そう」

と切り出してきた。

「実は我が領土は、近隣の領主たちから狙われておつてな。それ故にこの町を守るための装備を整えねばならぬ。そんなときに貴様がこの町に来ていと聞いてな、すぐに迎えをゆかせたのだ。貴様はすぐれた魔法具を作ると聞いておるからな。その魔法具を売ってほしいのだ」

やはりな、と思いつつ、

「魔法具、とは、具体的にどのような効果のものをいくつほどでしようか？」

「うむ。とりあえず防御用の物を500、回復用の物を250ほど売ってほしい。どうだ？」

「……数は十分に在庫がありますので問題はありませんが、さすがに今はそんなには持っておりません。領主様の前にお出しできるのは明日以降になります……」

「おお、それはいい。明日にでも持ってこられるならば十分だ。……ところで相談なのだが、貴様は身を守る魔法具は数多く作り、安価で売っておるようだが、攻撃用の物は一つも売っていないと聞く、それは本当か？」

「真実でございます」

「……それは何故か？」

「私は、自分の作ったものが戦いに使われ、人殺しに使われるのが嫌なのでございます。それ故に、戦いには役立たず、身を守ることしかできない魔法具のみを作るのでございます」

「我は領地を守る力として、貴様の魔法具を使いたいと申しとおる。それでもか？」

「はい、それでもでございます。

確かに領主様は立派な人格者でございます。ですが、領主様の部下の方々、次代おの領主様とその部下の方々は、はたして私の魔法具を攻撃のために使わないと断言できますでしょうか？それに、万が一私の魔法具が盗賊どもの手に渡った場合、大変なことになると思います。それは避けねばなりません」

ウソも方便とはよく言ったものだと思う。

「ですので、作れません」

「我が頼んでおるのか？」

「無理でございます」

「わかっておらん。……我は作れと言っておるのだぞ？」

その言葉と共に、扉が開き、兵達が飛び込んできて私に武器を突

き付け、取り囲んだ。

「作ると言うなら無傷で解放すると約束しよう。だが断るならば……」

本当に、立派な人格者だな。

「作りません」

「……貴様は今状況がわかっていないのか？」

「わかっていないのは領主様の方でございます。貴方が欲しいのは私の持つ魔法具。それは私を殺せば隠し場所がわからなくなり、手に入るのは今私が持っている数点のみになるでしょう。それでは意味がありません。金の卵を生む鶏を殺しては意味が無いでしょう？」

「……我が欲しいのは貴様の作る魔法具だ。別に五体満足の貴様ではない。……わかるか？ 我には貴様の両足を切り落とし、閉じ込めて魔法具を作らせると言う選択肢もあるのだぞ？ 魔法具作成に必要な知識と腕さえあればよいのだからな」

「無理でございます」

「そうか、そんなに作りたくないか。ならば仕方ない。やれ。殺すなよ」

その言葉と共に、周りの兵の武器が私の足を襲う。

……だが、

「…………お忘れですか？」

その武器は、私まで届く事はない。

驚く領主を見る私の目は相当に冷たいものだろう。

「噂に高き創造王が誰か。　この世界でテストメントを一番多く所持しているのは誰か。　…………私が先程言った『無理だ』とは武器を作る事に対してではありません。　私を害する事に対してでございます」

ちなみに、今まで作った製品は全て私が持ち歩いている。　ローブのポケットを別空間につながるように改造すれば倉庫がわりにもなる。　隠し場所云々は嘘だ。

「お分かりですか？　貴方では私を傷付ける事はできません」

領主の悔しそうな顔に、少し溜飲が下がる思いがする。

それでは、私はこれで帰らせていただきます。　…………ああ、ご心配なく。　商品はきちんと明日お渡しいたします。　料金は門番の方に知らせておきますので、きちんとご用意いただきますようお願いいたします」

そういい残し、呆然とする領主を気にせず部屋を出て屋敷を後にした。

次の日、言われた個数を納品しに屋敷へ向かったが、中には入れて貰えず、門番が内容を確認したあと料金を渡して来た。

聞けば領主は気分が悪いとのことだ。

私は仕方なく幻術を使って屋敷に入り、領主のいる部屋まで向かって行った。やがて領主の部屋までたどり着くと、気付かれないように領主の部屋に入り、机に着いて何かの書類を羊皮紙に書きなぐっている領主の背後に立つと、幻覚で体を縛り、動きを封じてから話しかけた。

「ごきげんよう、領主様」

「……！」

人を呼ばれても厄介なので、声も封じておいたのだが、自分の状況に驚き、目を白黒させる姿は、とても滑稽だった。

「落ち着いてください。私はあなたに危害を加えるつもりはありません。騒がないと約束していただければ、拘束を解きましょう。……約束していただけますね？」

その言葉に、領主はぶんぶんと頷きを返す。

それを見て、とりあえず口をきけるようにした瞬間、

「曲者じゃ……早く我を守れ……！」

と案の定叫び声をあげた。

だが何も反応は帰ってこない。

どうせこうなるであろうと思っていたので、開放する前に防音用の結界を張っておいたからだ。

話を続けたかった私は、返事が返って来ない事に戸惑いの表情を浮かべる領主に対し声をかける

「話を続けても構いませんか？」

「き、貴様！ 我の部下をどうした！？」

「どうもしておりません。 貴方様の声を届かせないように防音処理を施しただけです」

「一体何が目的だ！？ 金か！？」

「落ち着いて下さいと申しております。 私は金にはそれ程困っておりません。 日々の生活が出来れば十分でございますし、もう一生分の蓄えは出来ております。 今日こちらへ参りましたのは、注意事項を伝えに来ただけでございます」

「注意事項だと！？ 使い方ならわかっておるし、金は貴様の言い値を払ったぞ！ 他に何が有ると言うのだ！」

「私は私の魔法具を買って頂いた方には必ずある約束をしていただいております。 本来ならば今回お売りする500と250の魔法具の所有者となられる方々全てに会って約束をして頂きたいのですが、さすがにそれは骨が折れますので、代表である領主様にお話ししようかと」

「約束だと？ なんだそれは！？」

「簡単なことでございます。……私がお売りした魔法具は、決して人殺しには使用しないで頂きたいのです」

「……何？」

「正確には、人殺しの補助にも使わないで頂きたいのです。元々私の魔法具は全て護身用に作った物ですので、それ以外の用途には使えない用になっているのです。本来の用途以外の用途で使って、どんな不具合が起こっても保障はいたしかねます。……どうですか？ 約束して頂けますか？」

「……わかった。約束しよう。もとより貴様から魔法具を買ったのは我が領土を守るため。侵略に使う気はない」

「……そうですか、それはよかったです。ではその旨、部下の皆様にもお伝え頂けますよう。それでは私の用事はこれで終わりです。お邪魔いたしました、領主様。またのご利用お待ちしております」

言い終わると同時に気配と姿を消す。

そのまま待っていると、領主の顔はおびえから驚きに変わり、体の自由が戻っていることに気づいて、安堵を経て怒りに変わり、

「貴様ら！ 何をしておるか！」

部屋の外に向かって叫んだ。

すぐに領主の部下達が扉を開けて飛び込んできて、

「領主様！ 何事ですか?!」

「何事も何もあるか！ 警備担当は何をしておった！」

「……？ 賊でも入り込んだのですか？」

「……先程までそこに創造王メイキングがおったのだ！」

苛立ちを隠すことなく姿を消した私が立っている場所を指差す。

「創造王メイキングが?! 一体何のために?!」

「約束をしに来たんだそうだ」

「約束? どんな約束ですか？」

「あの魔法具を殺すためには使うな、だそうだ」

「確かに、創造王メイキングから魔法具を買つと必ず言われるという噂ですが……。約束したのですか？」

「……しなければどうなっていたかわからなかったからな」

「よろしいのですか? あれは元々隣の領土へ攻め込むために……」

「わかっておる。……何、かまわん。誓約の呪いの類をかけられた様子はない。破つても何の影響もない。無意味な約束だ」

「ですが、相手はあの……」

「やかましい！ さっさと戦の準備を進めろ！ それと、今の警備担当は減給だ！ 伝えておけ！」

「……はい、わかりました」

納得できない感情と不安と不満が混ざり合った顔を作った部下は、それでも領主に返事をして部屋から出て行く。

……横暴で浅慮な上司の元で働く苦勞するね。

そう思いながら部下と一緒に出て行く。

……それにしても、やはりこうなったか。

あの領主の噂と、実際に会って話してみた感じから、自分の忠告など聞かないであろうとは思っていたが、案の定だった。

「これであの領主も終わりかね……」

『testament』に刻み込んだ術式。

それは、人を殺したとき（敵密には致命傷を与えたとき）に発動する傷ついた者を回復させる術式だ。

テストメントを使用する際には、装備者がテストメントの宝石部分に血をたらし、契約のようなモノをしなければならぬ。

そしてその使用者が人を深く傷つけたとき、使用者の魔力が気を強制的に吸い取り、怪我を回復させる。

無論、回復させるための魔力や気は対象の怪我の具合によるが、たいていの場合自身の魔力と気をほとんどもっていかれる。

そんなことをされた装備者はたまったものではない。　気と魔力がほとんどゼロになれば、戦いどころか動くことすら儘ならぬだろう。

さらに今回売ったものに限っては、装備者が傷つけたものはもちろん、その周りで致命傷を負ったものにも回復魔法がかかるように調整をしておいた。

ただし、完全に回復させるのではなく、生き残れる程度の回復だ。

これならば、一人の魔力や気でも何人かは回復できるし、完全に回復するわけではないので戦いも長引かない。

けが人はかなり出るだろうが、両陣営ともに死人はほとんど出ないだろう。

……私の作った道具で死人なんぞ出させてやるものかね。

どんな者が、どんな楽しみを持っているかわからないのだから、会おう前に死んでしまわれてはつまらない。

……ここは私の遊び場だ。　私の手が届く範囲では面白くない事態など起こさせはせんよ。

一カ月後、ある奇妙な噂が流れた。

それは、ある地方の領主が隣の領主に戦いを挑んだが、敗戦したというものだ。

原因としては、戦いの直前に購入した魔道具の欠陥らしい。

前線からどんどん崩されて行き、結局領土は奪われ、領主は追放されたらしい。

だが不思議なことに、この戦争で、死者は一人も出なかったそうだ。

さらに、領主が追放され、新しい領主が納めるようになった土地では、以前の悪政から開放された領民が大喜びだそうだ。

と、こんな噂だった。

さらにそれと同時期に流れたもう一つの噂がある。

創造王メイキングが作った魔法具は、死人が出ることを許さない。

魔法具を受け取ったときの言葉により制約が魂に刻まれ、人を殺した所有者に裁きを下すらしい。

これは、創造王メイキングが平和を愛し、人が傷つくことが我慢ならない人物だからだそうだ、と。

二つ目の噂を聞いて、苦笑した人物がいるとかいないとか。

第四話（後書き）

今のところ、二日に一話ぐらいのペースですが、これからも守れるかどうかはわかりません。

リアルがかなり多忙なものですから……。
レポートが……。課題が……。テスト勉強が……。

まあ、現実には負けないようにがんばって執筆を続けますので、こんな駄文を読みたいと思って折られる奇特な方々は応援をお願いします。

乗せられやすい性格なので、限界ぶつちぎってがんばっちゃうと思いますから。

さて、次回はどのような話になるのでしょうか。
何十年かキンクリして友達を作る予定なのですが、果たしてどうなるやら。

まあこんな行き当たりばったりな駄目作者ですが、これからもよろしく願います。

それでは今日はこのあたりでお別れです。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第五話（前書き）

ぎりぎりセーフ。

何とか二日に一話投稿のペースは守りました。

これからも守っていききたいですね。

では、少々ぎりぎりですが。

創造王の遊び場 第五話、始まります。

第五話

この世界に来てからもう100年程が経った。

とりあえず、魔法世界はこちらに来てから30年程で一回りし終えた。

旅の目的だった達人達には大体出会い、私自身の強化も一通りすんでいたの、人里に下りて、商売を始める事にした。

今までも創造王^{メイキング}として行商人紛いの事はしていたが、今度は町で店を構えて固定客相手の商売を試みたいと思ったからだ。もちろん怪しい仮面はしていない。

創造王^{メイキング}としては決まった場所に拠点を作ることはできない。どんな厄介が舞い込むかわからないし、その厄介に関係ない一般人を巻き込むわけにもいかないからだ。

最初は二代目創造王^{メイキング}として各地を周り直すのも悪くない思ったが、段々と商品の売れ方が悪くなってきていたのだ。^{テストメント}

どうやら世界中にテストメントをばらまき過ぎたらしく、少し有名な骨董屋に行けば簡単に手に入るようになっていた。

ちょっとやそつとでは壊れたりしないし、能力も劣化なんかしないので、新しい物に取り替える必要も無くなり、供給が需要を上回ってしまったようだ。

なので、一つところに留まって別の商売を始めようと思ったのだ。

見た目が変わらないのは、長命なヘラス族の血が混ざっているためだ、という事にしてごまかした。

それでも20年程で移動しなければならなかったが。

商売は雑貨屋、ということにしている。

売っているのはアクセサリーに始まり、鍋等の台所用品、各地を回っていた時に集めた様々な地域の工芸品やそれを参考にして私なりに新しく作った土産物等だ。

メイキング
創造王の時のように強力な能力や機能は付与していない。

少し怪我をしにくくなったり、少々運が良くなったりするぐらいの軽いおまじない程度が精々だ。

製作には能力による創造ではなく、これもまた旅の途中で見つけた珍しい石や材木と、それらに加え近場の森で間引かれた木々の内、形や質が悪く建材として使えないものや建材として切り出した余りの内で良い所を二束三文やタダでもらってきたもの等を材料に、自分の手で削り、整え、着色して、と言うようにしている。

能力に頼りきるのは抵抗があったし、やってみると結構楽しいものだった。

そのおかげで単価は安く済み、質の良い物が安く手に入ると評判になり、近隣の町から仕事等やってきた者たちが土産に買ってい

き、持ち帰った町でまた評判になる、というように、どこの町でも店は繁盛した。

……引越す際は、噂の届いていない場所を探すのが大変になったが。

制作は、日中は店の奥にある工房で店番をしながら行い、夜は店を閉めて制作用の特殊な空間で行う。

その空間とは、以前交流のあった気のいい貴族に見せてもらった『ダイオラム魔法球』というものを参考に自分で作りあげた物だ。

本来のダイオラム魔法球は大きさ50センチメートルほどの透明な球殻の中に地形や環境などを圧縮し、閉じ込め、一つの独立した世界とするものだ。

中に入れる物も、小さな物ならば家が一軒程度、大きくても山が一つぐらいだそうだ。

あまり大きいと管理が大変らしい。

さらに、この魔法球の効果として、中と外の時間の進み方に差をつけられるというものがある。

具体的に、その貴族の魔法球は外の一時間が中の一日であり、中と外では時間の進み方が24倍違っていた。

だが私の魔法球は持ち運びを楽にするために直径2センチメートル程の球体で、いつもは紐をつけて首から下げている。

中に入っているのは、一つの『世界』だ。

閉じられた環境という意味の世界ではなく、文字通りの『世界』。

海もあれば山もあり、森もあれば生物たちもいる。

昼夜もあれば四季もあり、天気も変われば雷も落ちる。

唯一人間だけが存在しない、原始の世界ともいえる場所。

一万メートル四方の海の平面世界に、最初は私の工房たる一軒家のみ存在する小さな5メートル四方の小さな島を最初に作り、次にいくつもの大陸を作り、山や川、砂漠や湖などの地形を作った。

まずそこに森から持ち込んだ種や小さな木を植え、大気の二酸化炭素濃度を濃くしてから、一定周期でめぐる四季と昼夜のみを設定し、1000年ほど放置した。

とはいえ、私の魔法球は時間の差を自由に設定できるようにしてある。なのでとりあえず一日を100年にしておいたため、外で一日待つていればいいだけだったが。

そうして木々が繁殖したら今度は草食動物を一種類につき1000個体ずつ入れる。

大体もともと生息していた環境と同じ環境の場所に入れたので環境に淘汰されることはないと思う。

そうしてまた1000待つてから、今度は小型の肉食獣を同じく一種類につき1000個体ずつ入れる。

餌となる草食動物もかなり増えているから、肉食動物が飢え死にしたり草食動物が食い尽くされたりはしないだろう。

それからまた百年待ち、大型肉食獣を放り込む。

このようにすれば生態系のピラミッドを保てるだろう。

……捕獲には苦労した。数は多いし暴れるしで。特に魚とかは数が多いが食われやすいから親を100匹で足りるかどうかが不安だったけどかなったようだ。

そうして今度は超大型肉食獣（ドラゴンなど）の雌雄を2、3頭ずつ放り込んだ。

これに関しては入れすぎるとまずいため、繁殖できるぎりぎりにした。

まあ、生態系の頂点だと思っし大丈夫だろう。

季節や気候はすべての地域で同じではなく、とりあえず地球を参考にして、それぞれの組み合わせで24種類ぐらい作って、「それぞれの地域で異なる四季がめぐるようにした。

そうすると当然気圧の変化や水の循環なども起こるため、天候も規則的に不規則に変わる。

そのようにして作った、生物の箱庭のような魔法球。

その中心の、結界を張って生物が入れないようにした工房で、私

は作業をしている。

足りない材料も、魔法球の中でまかなえるしね。

さまざまな金属の鉱山も作ったので、金、銀、銅、鉄なども取れる。

それに、これだけの時差があると、例え一日で店の商品がすべて売れてしまっても次の日にはいつも通りに開店できる。

……まあ、そんなことをすると怪しまれるからしないがね。

そんなこんなで、我が店には周辺からかなりの客が来る。

そうになると、各地の噂話が数多く飛び込んでくる。

実はこれも店を開いた理由の一つだったりする。

噂話は多岐にわたる。

曰く、あそこの領主は名君だ。

曰く、ある領地では町と町をつなぐ街道の整備のため、護衛の戦士を含め、多くの人手を集めている。

曰く、隣町のはずれの酒場の看板娘は美人だが婚約者がいるので手が出せない。

為政者の評判から個人の色恋沙汰まで、本当にいろいろな噂が集まる。

酒場を開けばもつとさまざまな情報が集まるのだろうが、酔っぱらいの面倒を見るのはごめんだ。

ともあれ、つまらない情報が数多くある中、最近になってやっと面白い情報が私のところに舞い込んできた。

曰く、北のはずれにある火山の火口の中に『不死鳥』の群れがいる。

その噂を聞いた次の日から、店を臨時休店にして、私は噂の場所へと向かった。

いきなり火口に飛び込むのはまずいので、火山の近くの森まで飛んで行き、そこから森を探索しながら進んだ。

途中で今まで見つけてこなかった植物やその種を収集するためだ。

あまりいいものは見つからなかったが、一種類だけ、今まで見たことのない木の実があった。

見た目はみかんのようだが色は青く、大きさは直径5センチ程度だった。

一口食べてみたが、甘さ、苦さ、辛さ、渋み、酸味など、いろいろな味が混ざっており、あまり口に合わなかったが、何かしら効果があるかもしれないと思い、4、5こ懐に仕舞い込んだ。

そんなこんなで火山のふもとまでたどり着き、索敵能力を発動してみると、確かに火山の中に大型の鳥らしき反応があった。

火山の周りを搜索してみると、岩や木で隠されてはいるが大きな洞穴があり、そこから中に入っていけそうだ。

だが、洞窟の中からは有毒なガスが出てきており、普通の生物では入っていけないようだ。

実際、不用意に近付きすぎたのであろう生物の骨があちこちに転がっている。

私は、両耳にイヤリングをつけ、さらに自分の障壁を強化し、障壁内の大気を密閉してから、洞窟の中に入っていった。

第五話（後書き）

と、言う訳で第五話でした。

原作開始600年前ぐらいです。

今回は主人公が商売を始める話と魔法球について、さらに不死鳥に会いに行くまでのお話です。

この話は次回に続きます。

前回の後書きで友達ができるみたいなことを書きましたが、某ロリババアではありません。

友人とは言ってませんし。

ここまで言えばこの先も予想できてしまうと思いますが、まあ明言はしませんので次回の更新をお待ちください。

もちろん某ロリババアもきちんと登場させますが、まだ少し先の話になります。

必ず登場させますよ、

自分、あの人大好きですし。

ともあれ今日はこのあたりでお別れです。

今回はこのお話の続きです。

では、またお会いしましょう。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第六話（前書き）

前回同様ぎりぎりセーフ。
本当に申し訳ありません。

急いで書いたので、誤字脱字やわかりづらい表現があると思います
が、ご報告いただければ幸いです。

それではさっそくまいりましょう。

創造王の遊び場 第六話、始まります。

第六話

洞窟を進んで行く。

外からの光は入って一分もしないうちに届かなくなった。

密閉された障壁内で火を起こす程愚かではないので、光の魔法で道を照らす。

洞窟内部は複雑に曲がりくねっているうえ、いくつにも枝分かれしている。

それに加えてこのガスのせいで普通の人間ならば、この天然の要塞の中であつという間に息絶えてしまつたろう。

……この私でも、不死鳥たちのいる場所を感知できる能力がなければ、危ないかもしれない。

そんなことを考えながら、休むことなく進んで行く。

進めど進めど見えるのは洞窟のみ。

きちんと目的地に近付いていると実感できるものは、索敵能力と、

……この熱さか。

不死鳥たちがいるのは火山の中心部に近いところらしく、そこは当然のことながら灼熱地獄だ。

よって、目的地に近付けば近付くほどに周囲の温度は上がっていく。

最初は氷の魔法で自分の周りを冷やしていたのだが、ただでさえ障壁を張っているのにそのうえほかの魔法まで使うとなると魔力の消費が激しい。

初歩的な魔法ならまだしも、密閉型の障壁が高等魔法なのは当然として、氷の魔法についても、周囲の温度は中級魔法程度でも対処が追いつかなくなってきている。

仕方なく、概念付与能力を用いて、手持ちのネックレスに『周囲の熱エネルギーを吸い取り己の魔力とする』という能力を付け、進んでゆく。

こうすれば、周囲の熱が高くなるほどに魔力は回復していく。

……余剰の魔力は魔力保存用の宝石に封じておけばいい、と。

70年ほど前に、魔力容量の高い宝石の鉱山を見つけ、根こそぎほりつくしてから生まれた習慣だ。

魔力を大量にためておくことができる宝石に自分の魔力をためておき、使いたいときに使えるようにする。

こうしておけば万が一の時に魔力切れで困ることもないだろう。

日常的に魔力を貯蓄しているので、もうかなりたまっている。

もつとも店舗や工房の防衛用の術式のバッテリーとして魔力のたまった宝石を使っているので、たまるスピードはそんなに速くはない。

ためるのに集中しすぎて魔力をすべて注ぎ込んで敵にやられてしまつては意味がないのだから。

なので、睡眠の前に自分の総魔力の三割ほどを宝石に注ぎ込むのが寝る前の習慣になり、さらに旅先で魔力が大量に入った時にも貯蓄に回している。

ちなみに、これと同じことを気でも行っている。

違いと言えば、気をためているのは宝石ではなく、それ専用の魔法具であるということ。

宝石を見つけて魔力の貯蓄を思いつき、それを気にも応用できないかと考え新たな魔法具を作り出した結果である。

もつとも、魔力と違い気には汎用性がなく、せいぜい身体強化の類にしか使えないため貯蓄量ばかり増えてしまっているのが最近の悩みではあるが。

……そろそろそつちの方の活用法も考えなければね。

いろいろと案を考えながら進んでいくと、洞窟がだんだん明るくなつてきた。

だが、見えている光は太陽のような白くて明るい物ではなく、すべてを燃やし尽くすような灼熱の赤色だった。

魔法具のおかげで熱くはないが、目がつぶれそうなほどの強烈な光が襲ってくる。

急いで創造したサングラスをかけて、先へ進む。

強烈な光の先には広い空間があった。

どうやらここは火山の噴火口から地中に続く縦穴の途中にできた横穴らしい。

広さは面積が100m×200m、高さが100m程とそこそこの広さだ。

それぞれの壁面は緩いカーブを描き、ゆかも浅いすり鉢の様にへこみ、入ってきた洞穴からみて反対側には壁が無く、灼熱の光と身を焦がす熱さが襲ってくる。

ゆかには直径10メートル以上の岩が幾つもころがっており、そのうちの1際大きな岩の上に、

「やあ、こんにちは。遊びに来たよ?」

今回の目的がいた。

……素晴らしい

体長は20メートル程だろうか。

この灼熱の光にあってもなお紅く輝き、その羽毛は人間が一瞬で消し炭になるであろう高温にも焼け跡どころか焦げ目ひとつない。

この場所の王が誰であるかなど、疑問にすら上がらない。

神々しささえ感じる程に、その姿にみせられる。

そんな風に堂々と、不死鳥、フェニックスはそこにあつた。

(敵か、ならば排除する)

頭の中に響いてくる声。

殺意を多分に含んだ音ならぬ声を聞き、

「待つてくれ。 私は争いに来たのではない！ 話に来ただけだ
！」

(やかましいな、さっさと片付けよう)

「だから待つてくれと言っている！ 私の言葉はわかっているだ
ろう！？ そして私も君の思いはわかっている！」

(戯れ事だ、聞く意味はない)

「戯れ事ではないし聞く意味はあるとも！」

(……貴様、本当に私の意志がわかるのか?)

「ああ、わかっている」

どつやらやつと話ができそうだ。

(貴様、何故私の意志を読み取れる？ 貴様はどう見てもニンゲンであろう)

「ふむ、その答えは簡単だ。私が付けているこの耳飾り。これは対象の意志を聞き取り、理解出来る効果がある。それより、ひとつ聞きたいことがある」

(……なんだ。)

「この場所の空気は人間には毒だが君達には害は無いのか？」

(害があるならこんな所になどいるものか。 私たちにとってこの空気など、外の空気とならかわりない。 少々息苦しい程度だ)

「ならば、外の空気の方が心地良いのだね？」

(ここより幾分かはな。 だが、そんなことを聞いてどうする？ 我等はそんなことで外に出たりなどせんぞ?)

「別に外に出てもらわなくても良いよ。 この空気では私でもタダでは済まないのね。 ……少々場を整えさせて貰おう」

その言葉とともに、手の中に出した太い木製の杭を地面に叩き込

んだ。

(貴様！何を　！？)

「まあ見ていたまえ」

すると、地面に半ばまで刺さった杭を中心に魔法陣が広がり、瞬間にこの空間の内部全体を包み込んだ。

そして、異変はすぐに現れた。

(これは……、空気が……?)

「そう、この場の空気を浄化し外界と同じぐらいの環境にした。今そこに突き刺した杭は限定空間内の環境を整える効果を持つ。気温気圧湿度大気成分、何でも思いのままに出来るのだよ。いつでもどこでも快適に過ごせる空間を提供出来るこの商品、今なら私の話を聞くだけと言う超お得なお値段でお買い求め頂けますが、どうかね？」

(何のつもりだ？　貴様ここに何をしにきた?)

「言ったただろう？　話に来た、と。話をするのに障壁を挟んでいるというのは、相手を信用していないといわれても仕方のない行為だからね。邪魔な壁を取り払うためにはこうするほかに方法が思いつかなくてね。……ああそういえば、こちらで勝手に調整してしまっただが、何か不都合はあるかね？　やはりもう少し暑いほうがいいかね？」

(温度はこのくらいでいい。　だがニンゲン、話に来たというそ

の言葉、そう簡単に信用できると思うか？)

「まあ無理だろうね。しかしだからこそ話そうというのだ。誤解を解く方法はこれしかないだろう？」

(なるほど、確かにその通りだ。だがニンゲン、この状況を解くするのにもっと簡単な方法がある)

「ほう、それは何かね？」

(何、本当に簡単なことだ。……ここで貴様を排除すればいい！！)

その意思が響くのと同時に、不死鳥は飛び上がり、密閉型の障壁を解除していた小さなニンゲンに襲い掛かった。

不死“鳥”というだけあってその動きは素早く、鋭い爪の生えた足を獲物に向けて、高所から飛び掛かってくる。

対する獲物は逃げることにせず、ただ穏やかに立ちつくし、

ただ静かに、その爪を受け入れた。

第六話（後書き）

そんなこんなで、第六話でした。

今回の内容としては、

主人公が不死鳥さん宅にアポなし突撃訪問して勝手に掃除した拳句にふんぞり返っていたら殴られた、といったところですかね。

こうして客観的にみると最低ですねこの男。

人の家にはその家のルールや秩序があるので、そこに勝手に手を出すと、有難迷惑になってしまうので注意しましょう。

さて、何とか二日に一回更新するという目標は達成しているわけですが、少なくとも次回辺りは少々怪しいです。

いえね、課題がいっぱい出されてるんですよ。

なのでそれをかたづけながらだと執筆はむずかしいかなあ、と。そのように思います。

まあ、こちらの方をあきらめるといふ選択肢は始めから捨てているわけですが。

なので、次回の更新についてはひどく不安定です。

そのところをご理解いただき、あまり期待せずにお待ちください。

それでは今日はこの辺で。 またお会いしましょう。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第七話（前書き）

またまたまたぎりぎり投稿。

帰ってきてからの数時間でなんとか書き上げました。

ミスなどあると思いますので、報告よろしくお願いします。

そんなこんなで、今日もまた、

創造王の遊び場 第七話 始まります。

第七話

不死鳥の爪はニンゲンの体を貫いた。

ニンゲンの体を掴むようにしている片足の三本の爪の内、一本は腹を、残りの二本は肩を回って背後から胸を貫いている。

腹への一撃は内臓を幾つも砕いただろうし、背中からの二撃は肺を割ったはずだ。

(これで終わりだ)

今までも、自分達のすみかにヒトが来た事は何度かあり、その度に一番長く生きている自分が相手をしてきた。

来たのは今回の様に一人の時もあったし、団体の時もあった。

どちらにせよ対応は変わらない。

ただ排除し、新しいすみかへ移る。

それだけだ。

この場所にいられた期間は随分長かった。

その分愛着のような物もあるし、多少息苦しさはあったが、そのおかげで人間が入って来ることは今までなかった。

だが、一度ヒトが来た以上、ここももう安全ではない。

早くここを出て次のすみかを探す必要がある。

（しかし、今回のニンゲンは妙だったな）

己の爪で貫いた男を見る。

自分が攻撃をしたとき、この男は何もしなかった。

こんな所まで来られる程のニンゲンだ。

いくら自分の攻撃が早いとは言え、それでも防御か回避はするだろうし、もしかしたら反撃等も来るだろうと思っていた。

最終的な結果は変わらずとも、もっと時間がかかるものと思っていたのだが……、

（随分とあっけなかったな）

そう思いながら足を振り、最早生きてはいない侵入者を放り投げ、地面に転がす。

（さて、感じた気配はこいつの物だけだが、こいつを囷として気配を隠した他の侵入者が潜んでいないとも限らん。警戒は解けんな……）

「おや、気配を殺して訪問するのは暗殺者だけだと思って堂々と

正面から来たのだが、余計な懸念を与えてしまったかね？」

(……！？)

聞こえるはずの無い声に驚き、先程まで死体が有った場所を見ると、侵入者が服の埃を払いながら、何食わぬ顔で立っていた。

(馬鹿な！？ 何故生きている！？ 腹を貫き、肺も両方割った
！！ ほぼ即死のはずだ！！)

今まで何人もの侵入者を排除してきた経験が、確実に仕留めたと
言っている。

だが侵入者は生きていて、それどころか、

(何故傷一つ無い！？)

目の前の侵入者には、腹や胸の致命傷や、投げ捨てたときに付く
はずの擦り傷すらもなく、服に開いていたはずの穴すらない。

(幻覚魔法か……？)

「確かにそのような魔法を使えばこのような事も可能だがね、残
念ながら魔力感知まではごまかせん。私は確かに本物だよ」

(ならば、何故生きている！？)

「何、たいした事ではない。ただ、私が不老不死だと言うだけだよ」

(不老不死……だと?)

「そうとも。私は少々特殊な人間でね。決して老いる事は無いし、どんな傷も、それが例え致命傷でもすぐに治ってしまう。だから死なない。つまりは不老不死というわけだ」

(……要するに、私には貴様を殺せない、ということか)

「そうだ。だが、これで私が君達を狙っていたのではないとわかってくれたかね?」

(……どういう事が、言ってみろ)

「君達不死鳥を人間が狙う理由は主に、不老不死の研究のためと、魔道具の材料や儀式の道具等のためだ。後は鑑賞用にするこどぐらいか。まず、私に不老不死の研究は必要無い。もう不老不死だからね。次に、魔道具の材料や儀式の道具についてだが、先程見せた杭もそうだが、私は必要な物は自分で作れるし、そのための材料も無から作れる。そういう能力を持っていてね。だから君達を襲うなんて危ない橋を渡る必要も無い。鑑賞用についても、私は金は十分に持っている。だから見世物などやる必要は無い。………どうかね? 私が君達を襲う意味を持たない事がわかったかね?」

(……なるほど、確かにその通りだ。道理にかなっている)

「わかってくれて幸いだよ」

(ならば、なぜここに来た？ 今の話が真実ならば、貴様がここに来ることに何のメリットがある？)

「真実ならば、か。 まあ、不死の部分はともかく、不老については今すぐ証明するのは難しいからね。 それはおいおいわかってもらえばいい。 それと、ここにきて何のメリットがあるか、だったね。 それについては問題ないよ。 ちゃんと私にもメリットはある」

(それは、なんだ？)

「先ほども言ったが、私はここに君たちと話をしに来たのだよ。 だからメリットも、『君たちと話せること』、これに尽きる」

(わからんな、話し相手ならばここに来なくとも、外にニンゲンがいくらでもいるだろう。 そいつらと話していればよい)

「確かに、世間話程度ならばそれでもかまわない。 だが、そこでは私は普通の人間でいなければならぬ」

(……………)

「人間ならば人間の、私ならば私の思うことがある。 だが、そのの中では、私は普通の人間が思うことしか話せない。 普通の人間の思うことしかわかってもらえない。 不老不死である私の考えはすべて奥に仕舞い込まなければならぬ。 …… それでは窮屈なのだよ」

(それで、ここに来たのか?)

「ああ。町で不死鳥がここにいるという噂を聞いたときは喜びを押し殺すのが大変だったよ。なにせやっと、『多くの時を生きるもの』が見つかったのだからね。『やっと私は、自分をさらけ出せる場所を見つけたんだ』と、そう思っただけで喜んだ」

(だが、私と貴様では種族が違う。それでは分かり合うことは難しいだろう)

「そうだろうな。だが不可能ではない。それに私は人間ではないもつと別の、『私』という私だけの種族だ。もとより同じ種族と語り合えるとは思っていない。だから異種族と話し、分かり合おうとすることに何のためらいもない。だから、不死鳥よ」

「私と友になってくれ」

先ほどから響く目の前のニンゲンの言葉は、とてもまっすぐで、偽りが感じられない。

今までここに来た人間と同じような、何かを押し殺したような嫌な感じがしない。

おそらくこのニンゲンは、自分をさらけ出しているのだろう。

嘘偽りなく、自分の感情をぶつけてきているのだろう。

それは、今まで汚いニンゲンにしか出会ったことのない自分にはとても新鮮で。

とてもきれいなものだった。

今まで背後で多くの岩の陰に隠れていた同胞たちも、同じことを思ったらしく、皆、私とこのニンゲンとの会話に耳を傾けているのがわかる。

私は、目の前でこちらに向かって大げさに手を差し伸べ、動きを止めている人間を見て、そして、

(皆よ、この者に不信を抱くものはいるか?)

反応はない。これは、つまり……、

(ニンゲンよ、貴様、名はなんという?)

「ミコト。私の名前はミコトだ」

(そうか。……ならばミコト、お前が我らの友であろうとする限り、我らもミコトを友として迎え入れよう。そして同時に、先ほどまでの非礼をわびよう。すまなかった。……許してもらえるか?)

私の言葉にニンゲン、いや、ミコトは喜色をあらわにして、

「もちろんだとも！ では私からも謝罪と感謝を。いきなり訪れて勝手なことを言ってますまない。そして、こんな私を受け入れ

てくれて感謝する！ 無論、後ろの君たちにも、だ」

その言葉と共に、私の後ろから同胞たちが飛び立ち、ミコトの周りを取り囲む。

（さあ、まずは歓迎しよう、我らが友、ミコト。 我らのすみかへようこそ。 何も無いが、ゆっくりしていくといい。 皆とも話してやってくれ。 若い者などは特に、外の話を書きたがるだろう）

「ああ、もちろんだとも。 さあ君達、なんでも聞いてくれ。 私が今まで見聞きしたものをなんでも聞かせよう。 何、安心したまえ、私にも君達にも、時間は無限にあるのだから」

それから少しの間、私はミコトと皆が話しているのを見ていた。 皆、ミコトの話を興味深そうに聞いている。

それもそうだろう。 私たちには敵が多く、あまり外に出ることはできない。

私を含め、人の力が強くなるより前から生きている者たちならばともかく、若い者たちの中にはこの山の周り以外外の世界を知らない者さえいる。

そのような者たちにとって、ミコトの話はさぞ驚きに満ちていることだろう。

そんなことを思いながら、ふと見てみると、私たちの中でも特に若い 生まれてから大体50年ほど 者が、ミコトの着ている

ローブの一点をつつきながら、何事か言っているのが見えた。

(ミコト、ミコト、これ頂戴！)

「これ？ ……ああ、この木の実のことかね？」

ミコトは少しローブの中を探ると、青い木の実を差し出した。
あれは……、

(そう、それ！ それ頂戴！)

「ああ、いいとも、持って行きたまえ」

その木の実をもらって、その者はとてもうれしそうに、

(ありがと、ミコト！ 僕たちみんな、これ大好き！ ありがと、ミコト！)

早速木の実をつついて食べ始める。

「喜んでもらえてうれしいよ。 だが、これが皆の好物だ、というのは本当かね？」

(ああ、本当だ。 若いのに限らず長生きの者も、皆それが大好きだ)

「ならば次に来るときはこれをたくさん持って来よう」

(それはうれしいが……)

「……？ うれしいが、何かね？」

（若くて体の小さい者ならまだしも、私のように長生きして体が大きくなってしまった者には、その木の実は小さすぎてな。食べたい気がせんだよ）

「なるほど、そうか……。みんな、聞いてくれ。今日のことろはいったんここで帰らせてもらう。なに、3、4日で戻ってくる。その時には皆に贈り物も用意しておこう」

そういってミコトは、去って行った。

さて、何を持ってきてくれるのか……？

第七話（後書き）

と、言う訳で、第七話でした。

やっと友達ができました。 やったねミコト君！

でも友人は一人もないというボツチ君状態は継続中……。

そんなミコト君の贈り物とは……！？

大体わかると思いますが、次回に続きます。

そして今回は、初めて主人公以外の視点で物語を進めてみました。

何か違和感があるかもしれないかもしれませんが、その場合は報告お願いします。

それでは今日はこの辺で。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第八話（前書き）

少しは余裕が出てきました。

明日から冬休み。

この隙に書き溜めておきたいところですが、
休み明けに提出する課題も山のようにあるため、
なかなか難しそうです。

とまあ、そんなこんなで、

創造王の遊び場 第八話 始まります。

第八話

不死鳥達に断り、転移魔法の基点となる杭を新たに打ち込ませてもらい、私は自宅へ戻った。

こうしておけば、またすぐにあの場所へ転移出来る。

そしてすぐに魔法球の中に入り、工房の近くに新しくかなり大きめの島を作り、土壌を調整し、肥料を混ぜたあとに例の木の実の種を島の中心に、その他の草花の種を島全体に植えた。

そうしてすぐに魔法球の外に出る。

外での一日が魔法球内での100年になるため、外で15分程経過してから中に戻ると、中では一年程経って、種を植えた場所には細い木が立っていた。

順調に育っているのを確認すると、多めに肥料をやり、また外に出た。

そうして今度は一日、内部時間で100年経ってから入ると、そこには立派に育った大樹があった。

待っている一日の間にとってきた野性の蜜蜂の巣を中身ごと島に放つ。

そうして、以前から作っておいた人形（成人女性型）5体に擬似的な命と養蜂技術、蜂の世話をする命令を与え、樹の前に行き、

「さて、植物に概念を打ち込むのは初めてだが、うまく行ってくれよ……！」

『実りが大きくなる』という概念を大樹に付与し、外に出た。

そうしておいて、内部で一年経ってから入ってみると、

……少々うまく行きすぎたかね……？

そこにはたわわに実をつけた大樹があった。

……実の大きさが一つメートル程の実をたわわにつけた大樹が。

それらを収穫し、半数を加工して残りの実を持って外に出て、15分後にまた入り、一年後にもまた同じだけ実っている事を確認すると、新たに実や蜂蜜の加工法と草花の手入れ技術を人形達に与え、今まで出来た加工品を持って外に出た。

そうしてから、内部の大樹の島のみを別の魔法球に移し替え、時間差を24倍（内部の一日が外の一時間）に設定した。

あまりたくさん出来ても困るしね。

準備が出来たので、不死鳥達の元へ向かう。

打ち込んだ杭を頼りに転移してみると、

(……ん？ああ、ミコト。来てくれたのか。)

ぞ)
(この間は急に帰ってしまったからな、どうしたのかと心配したぞ)

(今日はどんな話を聞かせてくれるんだ?)

(ミコト、ミコト、おかえり!)

大きいのは10メートル以上、小さいのは50センチメートル程と様々な大きさの不死鳥達から歓迎の意思が一齐に飛んできた。

……なかなか壮観だね。たった一日で随分懐かれたものだ。

そう思い苦笑を得るが、それでもすぐに嬉しさがそれを上回り、笑顔で皆に挨拶を返していく。

そうしながらこのリーダーである長(そう呼んでくれと言われた。彼等には固有の名前は無いらしく、また必要なかったらしい)に近付いていく。

「やあ、長。 元気かね?」

(ああ、元気だとも、ミコト。よくきたな)

「ああ、またすぐに来ると約束したからね。 私は約束は必ず守

るよ?」

(ほう、ならばもう一つの約束の方も期待して良いのかな?)

「もちろんだとも。 さあ、これだ。 受取りたまえ」

その言葉と共に、虚空に手を差し入れ、中に入っている実を取り出す。

大分前に作った虚空倉庫。

転移術や空間操作術を組み合わせ、膨大な容積を持つ空間を異次元に作り、鍵である魔法具(私の場合は左手のブレスレット)を持つものがしよと思えばいつでもどこでも持ち物を仕舞い、取り出せる。

きちんと整理しないと目的の物を探すのに苦労することになるが、それさえきちんとすればとても便利だし、なにもない空中からいきなり何かを取り出して相手の驚く顔を見られるのは気持ちが良い。

今回に限っては驚く顔は見られないが(不死鳥の表情を読むのは私にはまだ無理だ。一応表情はあるらしいが)、わずかに喜びの混ざった意思を聞いただけで十分だ。

(こっつ、これは……!)

「種を持って帰り、私なりの工夫を加えて育ててみた。 味は変わっていないと思うが、私にはわからない違いがあるかも知れん。 食べて確かめてくれないか?」

（あ、ああ。頂こう）

長は恐る恐ると言った感じで実にクチバシを伸ばす。

何度が実にクチバシを刺して皮を取り除き、中身が見えたら果肉にかぶりつき、飲み込む。

「どうかね、味に何か違いは有るかね？」

（いや、懐かしい味だ。完全に同じでは無いが、むしろかつて食べていた物より旨くなっている）

「ふむ。良い方に変わっているならば、まあ良いだろう」

（ああ、久しぶりにこの実を思い切り頬張る事が出来た。ありがとう、ミコト）

「喜んで貰えて何よりだ。……さて、長のお墨付きも頂いた。皆、存分に味わいたまえ！」

言いながら虚空倉庫の入口を大きく広げ、持ってきた実を全て取り出す。

何も無い空間から巨大な実がゴロゴロ出てくるという光景に、不死鳥達は皆驚いているようだが、次第に喜びが溢れていくのが目に見えてわかってくる。

「どうしたのかね？ 楽しく話すのに茶菓子は付き物だろう。

残念ながら君達の好みがわからないため茶は用意出来なかったが、私が用意出来る限りの菓子を持ってきた。さあ、この時間を存分

に楽しもつじや無いか!」

この言葉で、皆の間に喜び以外の感情はなくなった。

それからの時間はとても愉快なものとなった。

不死鳥達は口々においしいと言い、礼を言った。

好物を食べたからなのか、皆の空気がどんどん明るくなり、この広い空間が陽気な空気で満たされた。

元気な若鳥達はもちろん、落ち着いた雰囲気の間もニコニコ笑って隣にいる者に思い出話をしている。

他にも、笑って騒ぎすぎて疲れたのかふらふらしている者もいるし、なぜか泣いているものや怒っている者、黙って黙々と実を食べている者も……、

……というか、酔っ払ってないかね、これは？

よくみれば皆ろれつが回ってないし、歩けず座り込んでいる者がほとんどだ。

きちんと話している様に見える長も、話し相手が寝ているのに気付かず同じ話を繰り返している。

……おかしいね、アルコール分は入っていないはずだが……？

食べ残しの実の一部を食べてみても酒気は感じない。

そのうち、一羽二羽と倒れて眠っていき、最後には誰もいない空間に8ループ目の思い出話をしている長だけが残った。

倒れた者を調べてみても酔っ払いの症状以外は見つからない。

……ベースが人間である私には影響がないことをみると、精霊系の種族のみに作用する成分でも入っているのかな？

そんなことを考えつつも、とりあえずは、

「……水でも用意しておくかね」

そう思っただけで、いつの間にか長も撃沈しており、残ったのは自分と食い散らかされた実の残骸と、倒れて寝ている不死鳥達だけだった。

翌日になって目を覚ました不死鳥達を介抱しながら（その際に『毒を盛ったのか』という疑惑も出たが、寝ている間に自分達の身に何もされていない事を確かめるとすぐに消えて無くなった）長に話を聞いてみると、今まで実を食べてもこっちはならなかったというところで、どうやら実を大きくしたときに何かしらの変化があったらしい。

不死鳥達の症状は人間の二日酔いと全く同じく頭痛に吐き気等で水を飲ませると少しは緩和された。

長と色々話して、やはり私の仮説通り、精霊系種族のみに作用するアルコールに似た成分だろうという結論に達した。

せっかくの土産だったが思わぬ副作用により破棄される事になった。

……と思ったのだが、予想外に好評で『時々持つて来てくれ』と頼まれた。

そのところは人も不死鳥も変わらないらしい。

……精霊系種族に対して良い商売になるかも知れないね。

新しい商売の予感がした時だった。

PS

名前と顔を隠して売り出した精霊系種族専用アルコール『スピリット』は大好評で、例の樹にやった肥料代を引いてもかなりの儲けになった。

酒場からの要望により、現在新しい味を制作中である。

第八話（後書き）

そんなわけで、第八話をお送りしました。

また、この小説の中での設定として、『不死鳥は炎の精霊の一種』ということになってますのでご了承ください。

ともあれ、これで四話にわたってお送りした不死鳥・遭遇編はひとまずおしまいです。

次はいよいよあのお方が登場！

……できればいいな……。

まあとりあえず今までよりは執筆に時間が取れるようになりますので、

テンポよく投稿できると思います。

また、この後三つほど大きなイベントがありますが、そのあとは戦争まで300年ほど時間が開いてしまいます。

そこで、こんな話を書いてほしいというアイデアがあればお聞かせください。

自分の文才の許す範囲で書き上げたいと思います。

この後の予定としては、

- 1、あのお方との遭遇
- 2、あのお方との日常と修行
- 3、不死鳥関連のイベント

空白期

4、戦争

という流れになっております。

まあ、脳内プロットなので多少変わることがあるとは思いますが、こんな感じですよ。

この空白期に起こしてほしいイベントや、

こんな話が読みたいなどのアイデアやネタがあれば、ドシドシお寄せください。

お待ちしております。

それでは今日はこの辺で、

ここまで読んでくださったあなたに最大限の感謝を。

第九話（前書き）

メリ・クリスマス！

皆様いかがお過ごしですか？

私は二人きりでお出かけしてきました。

何の変哲もない買い物でしたが、とても楽しかったです。

ええ、同性の友達でなければもっと楽しかったんでしょうね。

こんなさみしい恋人いない歴〃人生な人間ですが、
投稿の方は頑張っていききたいと思っています。

そんなわけで今日もまた、

創造王の遊び場 第九話 始まります。

第九話

私がこの世界に来てから200年ほどが経った。

正直言つて、もう少し先の時代に送ってもらえばよかったかな、と思う時もある。

原作開始まであと500年ほど。

少々暇になつてしまう。

不死鳥たちとの交流も続いているし、月に一度ぐらいは『酒精の実』（精霊を酔わせる例の実の事だ）を持っていき、酒宴を行っている。

まあ、私は精霊ではないので、『酒精の実』を使った果実酒を飲んでるが。

そういえば、精霊用アルコール飲料『スピリット』は依然として人気商品だ。

売り出して100年ほど経つが、いまだに根強い人気がある。

まあ、うちの会社の独占商品だから仕方のない事とも言えるが。

その会社、正式には酒造会社『バツカスの泉』というのだが、つい先日創立100周年を記念して発売した新製品『スピリット・ウンディーネの吐息』も好評で、大いに売れた。

ミントを混ぜた涼しげな口当たりで、キャッチコピーが『クールな恋人に罵倒されたようなゾクゾク感に夢中になる！』というものだ。

先ほどの果実酒も精霊以外の種族向けに発売しているがなかなか評判がいい。

『精霊系種族と同じ味を楽しめる』というのが理由らしい。

ちなみに、『バツカスの泉』の本拠地を知る者は誰もいない。

各地に販売所はあるが、本社の場所や製造工場の場所は誰にも教えていない。

というより、世界のどこにもそのようなものは存在せず、私が『酒精の実』の樹を植えた魔法球内の島を広くして、そこで製造と新製品の開発を行い、完成品を各地の販売所に転送している。

従業員は全員擬似的な魂を与えられた人形たちだ。

まあ人形とはいっても見た目は魔法世界の人々と変わらない。

普通の人々の中にも違和感はないし、皆種族や外見はバラバラだ。

外見はともかく種族が違うのは、それぞれの工程に合わせているような種族を模した人形を作ったからだ。

擬似魂も、100年ほどで学習が終わり、普通に感情を持つこと

ができる。

外見や見た目の違いからか、さまざまな性格の個体が生まれることとなった。

彼らにも給料や休暇が与えられ、休みの日には外界に出て楽しむことも許可している。

まあ、見た目が変化しないのをごまかすために認識阻害魔法はかけていかなければならないが、田舎町ならまだしも人の移り変わりが激しい都市クラスの町なら全く問題なくまぎれることができる。

私自身は経営にはほとんど口を出さず、時々相談を受け指示を出したり、最終的な判断を下したりするぐらいで、時間の大半は雑貨屋の経営を一人で行っている。

今でも20年ごとに引越しを繰り返しながら雑貨屋は続けている。

客商売をすることによって噂や情報を集められると言う利点もあるが、何よりやっていて楽しいからだ。

店名は統一すると私の不老不死がばれるきつかけとなってしまう可能性があるなので、引越すたびに変えている。

前は『ザ・ワード』（御言より）だったし、その前は『イメージ』（創造＝想像より）だった。

今は比較的大きな町で、『フレーム・バード』（不死鳥の外見より。もうネタがなくなってきた）という店名で店を出している。

今回は大きな町であり、近くに学校などもあることから時間帯によつてはかなり忙しい。

その分いろいろな話をきけるのだが、最近子供たちの数が少なくなつてきている。

どうも学校が終わつても寄り道せずには急いで帰るものが増えていくようだ。

大人からすれば喜ばしいことなのだろうが、子どもが皆簡単に楽しい時間をあきらめるはずがないので、何かしらの事態が起きていくのだろうか。

そう思つて比較的暇な時間に来た客にいろいろ話を聞いてみると、どうやら近くに危険な犯罪者が来ているとか。

旧世界や魔法世界で何人もの人を襲い、殺してきた重罪人らしい。

その者が、最近この近くの町に現れたという。

その町でも討伐隊が組まれ、撃退しようとしたそうだが返り討ちに合つたそうだ。

その町から、今度はこの町に来るのではないかとの噂が立ち、そのために子どもたちはあまり外を出歩かず、早く家に帰っているらしい。

聞いてみれば簡単な理由だった。

自分が襲われるかもしれないという恐怖が、子どもたちの好奇心や遊び心に勝った。

ただ、それだけのことだ。

特に面白い話でもなかったが、ある言葉が、私の興味を大きく引いた。

曰く、その者は『吸血鬼の真祖』である、と。

吸血鬼と言えば不老不死で有名だ。会ってみて損はないだろう。

そう思って、その者の話をもっと詳しくしてほしいと頼んだ。

すると客は、噂だから本当ではないかもしれない、という言葉を最初に置いて語りだした。

曰く、その者は氷と闇を使う魔法使いである。

曰く、その者は『旧世界（地球）』出身で、30年ほど前から魔法世界に渡ってきた。

曰く、その者は女、子どもは殺さず氷漬けにする。

曰く、その者は人形を使って戦う。

曰く、その者は見た目は金髪の美しい少女だが、もう1000年は生きている。

曰く、吸血鬼なので不死身だが、ネギとニンニクが苦手らしい。

曰く、その吸血鬼の、彼女の名前は、

『エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル』

その名前を聞いたとき、久しく忘れていた原作知識が蘇ってきた。

そういえば、彼女が吸血鬼化して旅に出るのが原作開始の600年程前だった。

そこから考えると、旧世界で迫害され、そして魔法世界に渡って来て、しかしこちらでも指名手配されていて、その追手から逃げ続けながら居場所を探している、というところだろうか。

……まあなんにしても、彼女も不死の種族だ、接触しない手はない。

そう思うと私は、情報をくれた客に礼を言い、客が来ないのならば仕方ないということにして店を一時閉店とすると、すぐに索敵能力を最大限に広げ、彼女を探すことにした。

すると、少し離れた森の奥に彼女らしき反応と、それを追う複数
の反応があった。

それを確認すると、私はすぐに行動を開始した。

第九話（後書き）

そんなわけで、第九話をお送りしました。

ついに登場！ 例のあのお方ことエターナル（21）・エヴァンジェリンさん！

私の大好きなキャラです。

今回は話しの導入部分のため、少々短くなってしまいました。

ちなみに、主人公は原作知識のかなりの部分を忘れてしまっています。

長い年月の間に、修行やら経営やらで、そんなことを考えている余裕がなかったからです。

さすがに印象深いこと（戦争の事や、主要キャラの事など）は覚えていますが、細かいことは覚えてません。

このようにしたのは、あまりにも先のことを知っている、展開が固定されてしまうと思ったからです。

イベントなどの流れとその結果をわかってしまっていると、介入すれば簡単に終わってしまいますし、介入しなければ知っているのに助けられない傍観者役になってしまうことになり、話に膨らみを持たせるのが自分の文才では難しいと判断しましたので。

また、今回の『エヴァンジェリンの吸血鬼化イベント』を1000年程スルーしたのにもまた別の考えがあります。

そのことについてはまた後程お話ししましょう。

とりあえず、次回はエヴァサイドでお送りする予定です。

それでは今日はこの辺で。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第十話（前書き）

はい、今日も何とかペースを守りつつ更新です。
今日は全部エヴァさんサイドでお送りします。

少々戸惑いましたが、何とか仕上げました。

何かおかしいところを発見したら、教えていただけると幸いです。

それでは、今日もまた、

創造王の遊び場 第十話 始まります。

第十話

……くそっ！ しつこい！！

ここは深い森の中だ。

当然私以外の姿はない。

だがわかる。

わかってしまう。

ヒト以上の感覚を持つこの吸血鬼の体は、私が察知できるぎりぎりの距離を維持している2人の気配を感じている。

こいつらは罔のようなもので、他にも気配を断つことに長けた者が何人かいるだろう。

でもなければこの私をたった二人で、しかもこんなに遠くまで追ってくるはずがない。

おそらく、私が罔の2人を襲おうと近付いた瞬間に隠れた者が私を後ろから襲うという作戦だろう。

つまり奴らは、この私がいい加減にしびれを切らしてやけになる瞬間を待っているのだ。

……もっとも、そんなことは有りえんがな。

これでも100年は生きている。

今私を追いかけてきている誰よりも経験を積んでいるだろう。

特に追いかける経験ならばだれにも負けない自信がある。

……まあ、何の自慢にもならんがな。

苦笑して、それから気を引き締めなおす。

下手に気を抜いて隙を見せたら奴らは襲いかかって来るだろう。

ずっと追われ続け、しかし襲われることもなく、休むことも許さ
れない。

強い敵には正面からでは勝てない。

ならば、と裏をかいてくる。

その考えは正しい。

どんな経過でも勝てばすべてが正しくなる。

卑怯な手でも勝者の側からすれば策略だ。

弱者の声など踏みつぶされて誰にも聞こえることはない。

だから奴らは、強者である私に精神的な揺さぶりをかけに来た。

だが、奴らは人間だ。 耐久力は吸血鬼と比べ物にならない。

しかし、奴らはその障害を乗り越えてきた。

人間の武器はその数の多さ。

個には組織で襲い掛かってくる。

しかも奴らはかなり大きな組織らしい。

追われ続けてもう一週間ほどになるが、何度か人員が交代している。

おそらく、私が逃げている位置を逐一報告し、予想を立てて交代の人員を送っているのだろう。

こちらは一人。 休むことは許されず、ただ精神をすり減らしていく毎日。

その点奴らは、交代で私を監視し、交代で休んでいる。

これでは負けは見えている。

………いつそのこと、体力が残っているうちに奴らを

そう思いもしたが、奴らも弱者とはいえ手練れだ。

さらに、先の戦いで自分の従者である兵器人形『チャチャゼロ』は壊されてしまっている。

幸い核は無事だったため、修理すれば元通りだが、その暇さえ奴らは与えてはくれない。

従者のいない魔法使いなどいい的にしかならない。

吸血鬼の多大な魔力があっても使えなければ意味がない。

身体能力は普通の人間とは比べ物にならないほど高いが、このようだからめ手を使ってくる奴らだ、その対策も取られているだろう。

状況は硬直していて、しかもこのままでは自分がどんどん不利になっっていく。

……くそっ！ そのためにも早くチャチャゼロを修理したいのに

……！！

思考に焦りが出始め、しかもそのことに気づきさらに焦りが膨らんでいく。

……くそ！ なんで私がこんな目に……！！

いつの間にか思考は別の方向へ向かっていった。

その思考は、この100年間幾度となく行ったもの。

すなわち、吸血鬼こんなからだになったことを恨むもの。

なんで、なんで、どうして。

何度尋ねても返事など帰ってくるはずもない。

尋ねる相手など自分しかおらず、自分も答えなど持っていないのだから。

唯一の答えとなりそうなものは、もうとっくに壊してしまった。

10歳の誕生日に、自分を吸血鬼こんなからたにした男は、この手で殺してしまっただから。

その時点での恨みは晴らしてしまい、そのあとに生まれたものをぶつける場所はもう失われてしまった。

よってその恨みは自分の中に溜め込まれるばかり。

そうやって溜め込まれたものが100年分。

人間ならばとっくに狂っているだろう。

そうならないのは自分が吸血鬼だから。

だがそれは幸いにはなりえない。

発狂という逃げ道がなくなったということなのだから。

ならばいっそのこと、とつかまって処刑されてみようかと思ったこともある。

だが、今ある道具では自分を傷つけることはできても完全に殺すことはできない。

苦痛があるばかりで、死という安らぎにたどり着くことはない。

自分に残された道は、ただ生き続けるという地獄のみ。

そうしてまた、晴らせぬ恨みがまた一つ積み重なる。

いつか自分を受け入れてくれる場所がある、と信じて旅をしてみても、出会うのは自分を狙う刺客のみ。

一縷の望みを託してわたってきた魔法世界にも、そんな場所はなかった。

ばれれば追われ、隠してもばれ、また追われる日々。

いい加減うんざりだ。

だがそれでも、逃げ道がない以上、そこに居続けるしかない。

恐怖と苦痛、疲労、そして、……孤独。

それらと共に生きていくしかない。

……いや、孤独だけは解決できるな……。

そう、孤独だけは解決する手段がある。

とても簡単な方法が、一つだけ。

気に入った人間を吸血鬼なかまにすればいい。

そこまで考えて、考えてしまった自分に恐怖する。

いきなり吸血鬼はけものにされる恐怖と絶望を自分は知っているはずなのに。

にもかかわらずその方法を考え、一瞬とはいえ『それも良いな』と考えてしまった自分の吸血鬼じぶんらしさが恐ろしく、また嫌になる。

そうしてまた一つ、自分に恨みを積み重ねる。

罪重ねていく。

そんな風に暗い考えに取り憑かれていき、またこの果てのない追いかけてこの疲れから、意識がもうろうとしてくる。

また、たとえ今の自分が日の光に触れても大丈夫な体になつたとはいえ、それでも太陽の光が好きになつたわけではなく、いくら日の光を避けて森の中を進んでいるとはいえその精神的な苦痛もあいまって、集中力はもう底を尽きかけている。

だから気が付かなかった。

追っ手の状況にも。

身の回りの気配にも。

自分に近付いてくる気配にも。

自分の目の前に現れた男の姿にも。

反応できなかった。

いきなりあらわれた（実際には気配も隠さず近付いてきていたのだが）男の姿に、一瞬何も考えることができなかった。

目の前に現れた男はローブをまとっており、顔はよく見えない。

気配を隠していた追っ手が隙ができたと判断して襲い掛かってきたのだらう。

……くそっ！　ここまでか！！

今日だけでも何度ついたかわからない悪態を心の中で突きつつ、臨戦態勢を取る。

だが、すぐに違和感に気付く。

……どうしてこいつは今私の目の前にいる……？

隙について襲ってくるならば、そもそも自分の視界に入ること自

体がおかしい。

全く視界に入らずに仕留めるか、姿を見た時にはもう動けなくしておくのがこいつの仕事のはずだ。

なのに私は疲労はあれども無事であるし、体も動く。

ならばこいつは追っ手ではないただの一般人か、あるいは、

……何かの罠か。

後者の可能性が高い。

いつまでたつても隙を作らない私に奴らがじれて、隙を作るために設置した罠。

確かにいきなり目の前に人影が現れれば驚き、隙もできるだろう。

だが、その考えもすぐにおかしいと気付く。

その理由も簡単で、罠だと考えることができているからである。

本来ならば、目の前の男を見て、気を取られた瞬間に仕留められていないのは不自然だ。

ということは何でもない。

ということは……。

「貴様、何者だ？　ここいらの町の者か？」

なんだかわからないが、考えていても埒が明かないので、とりあえず質問してみることにする。

そうして、関係者ならば始末するなりなんなりするし、無関係ならば最低限の警戒は残しつつ巻き込まないようにここから離れることにしようと思う。

そんな悠長なことを考えている余裕はないのに、ぼやけた頭は平和なことを考えてしまう。

戸惑ったような口ぶりならば無関係、押し殺したような声ならば関係者。

そういう判断基準を持って、一言目で見極めようと思った。

そして、目の前の男はローブのフード部分を背中側にやり、奇妙な髪形と髪色（頭髪すべてを頭の後ろになでつけたような髪型に、顔のサイドに一筋白髪が入った黒髪）に鋭い視線を持った顔を出す。

「やあ、こんにちは、エヴァンジェリン君。……君と友人になりに来たよ」「

「……………は？」

落ち着き払った声に予想していない言葉。

判断基準外のセリフにまた思考が止まる。

……なんだ？ こいつはなんなんだ？ いやマジで。

戸惑っていると、目の前の男は何を勘違いしたのか、

「ああ、君を追いかけていたストーカー達四人なら君の幻を追いかけて明後日の方角に向かったよ。だから君は安心して私と歓談できる。心配はいらないよ。私は場をわきまえずに長話をするほど愚かではないからね」

そんな訳のわからないことを言い出した。

だが、辺りの気配を探ってみると、確かに今まで感じていた気配が見当はずれな方向へ去っていく。

……助かった、のか？ いや、その前にこいつは……？

一瞬安堵を得そうになるが、気を引き締めて目の前の男の正体を暴こうとするが、

「……貴様、何……者だ。何の……つもりで……こんなこと……を……」

一瞬でも得てしまった安堵により、体は休息を求めてしまう。

……まず……い……。

そうして意識は遠くなり、そのまま地面に倒れこんでしまう。

意識を失う直前に感じた地面の感触は、なぜか温かく、そして懐かしいモノだった。

第十話（後書き）

はい、と言う訳で第十話でした。

やっと通し番号でも話数でも二ケタにたどり着きました。

なんか知らぬ間にアクセス数がPVが13,000アクセス、ユニークが2,600人となっており、とてもうれしかったです。

この調子で頑張っていきたいと思います。

それと、以前募集したアンケートですが、まだまだ募集しておりますので、ドシドシお寄せください。

というか、まだひとりも来ていません。

このままだといきなり300年程キンクリする羽目になるので、それがいやだという方は、ぜひご意見をお聞かせください。

よろしく願いします。

それでは今日はこの辺で。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第十一話（前書き）

更新です。

エヴァ編もあともう少し。

張り切ってまいりたいと思います。

それではさっそく行きましょう。

創造王の遊び場 第十一話 始まります。

第十一話

暖かい。

心地好い、暖かさ。

この100年間、感じる事のなかった空気。

100年前までは当たり前だった空気。

100年前にいきなり奪われた空気。

もう得られるはずの無い物を、なぜかまた感じている。

それはまるで、今までの100年が夢だったとでも言うように。

目を覚ませば優しくかった使用人がいて、着替えて朝食に行けば父と母が笑顔でいてくれて。

その笑顔に自分も笑顔になって、元気良く、でもおしとやかに挨拶をして。

それを見た両親の顔がもっと優しいものとなって。

そうしてそのまま朝食が始まって。

そんな日常の始まりを思い出させるような、そんな空気。

今では非日常の最たるものとなってしまった、そんな空気。

取り戻せない物であるとわかっていたとしても、諦め切れない。

もしかしたら、今までの出来事は全て悪い夢で。

目が覚めたら、いつも通りの日常非日常が始まるかも知れないと。

そう思って目覚め、何度絶望したことが。

それでもなお、信じて、祈ってしまう。

目を開ければ、全てが悪い夢になっていますように、と。

そして今もまた、そんなことを考えながら、目を開けた。

そこはまだ夢の中だった。

真っ白なシーツにふかふかのベッド、

横を見れば開け放たれた窓からは木漏れ日が差し込み、

反対側を見れば寝室としては一般的な広さの部屋に趣味のよい家具がほど良い加減で置いてあり、掃除もよく行き届いている部屋がある。

今の自分では夢でしか出会えない物ばかりがそこに並んでいる。

てつきりどこかの洞穴か廃屋でいつものように目覚めたと思っていたのだが、まだやはり夢の中らしい。

ならばもう少し浸っていようと部屋の中や窓の外をぼーっと眺めていると、夢の中に見知らぬ登場人物が現れた。

その人物は部屋の扉を静かにあけて中に入ってきた。

そして私が目を覚まし、起き上がっているのがわかると顔を笑顔にして、

「おはようございますお嬢様。 お目覚めはいかがでしょう？」

私の家にはこんな家政婦はいたっけか、と思いながら返事を返す。

「ああ、悪くない」

「それはようございました」

にっこり笑ったその女は、自分の着替えを手伝ってかわいらしい外見相応（年相応ではない）の服を着せると、まだ少しぼーっとしている私に、

「それでは朝食にいたしましょう。 準備はもうできておりますし、ご主人様もお待ちです」

そう言って私をどこかに案内していく。

ずいぶん長い夢だなあ、とか、こんな屋敷見たことあったかなあ、

とか考えながらその女についていく。

少し歩くと他の部屋の物より少し大きく立派な扉があり、私を案内してきた女はその前で立ち止まり、

「こちらでご主人様がお待ちです。どうぞお入りください」と促してくる。

そのうえ扉を開けてくれもしたので、もはや入る以外の選択肢はなくなつた。

そうして中に入ると、寝室や廊下と同様によく掃除が行き届き、家具の趣味もいい、広々とした部屋があつた。

その部屋の真ん中には少々大きめの机があり、そこにはおいしそうな朝食が2人分向かい合わせて並んでいる。

扉から少し歩いたところには私が座るのであるう椅子があり、その席の机を挟んだ反対側には、男が座っていた。

夢ならばそこに父がいるのだろうか、と試ってみてみると、残念ながらその男は父ではない見知らぬ誰かだった。

少々残念に思いながらも、では誰だろう？ とよく見てみると、どこかで見た覚えのある顔だ。

見た覚えはあるのだが、と思いつけないでいると、その様子を眺めていたであろう男が苦笑気味に声をかけていた。

「やあ、おはよう。よく眠れたかね？」

そのどこか偉そうな声に、私は寝ぼけた頭を一瞬でクリアにし、今までのことを思いだしていた。

……そうだ、こいつは森の中で私に声をかけてきた……！！

思い出した瞬間に私は周囲を警戒し始めるが、

「今更何をやっているのかね。私とその気なら君は三桁は殺されているよ？」

「うるさい！ 貴様は何者だ！ 私をどうする気だ！？」

「私が何者か、か……。それは私も知りたいね。私という種族は私しかいないだろうからね。説明しようにも『私は私だ』としか言えんよ。あと、君をどうする気かと言えば、これから始まる朝食に招待しようとしているだけなのだがね」

「ふざけるな！！ 貴様、私が誰だかわかっていないのか！？」

「わかっていなかったらどうするつもりかね？ 自分は悪名高き『吸血鬼の真祖』だとも言うつもりかね？ そんなことをしてもトラブルの種にしかならんよ、エヴァンジェリン君？」

「……っ！ 貴様、私が誰だかわかっていてなぜここに招いた？ 私は追われる身だぞ？ 下手に匿えば貴様も追われることになる。それがわからんのか？」

「下手に匿えば、か。ならば上手く匿えばいい。それだけの

不老不死を『そんなもの』だと？

私がこんなにも苦しめられているものに対して『そんなもの』？
許せるわけがない。

何も知らぬ『若造』風情が、

「知った風な口を、きくなあ——————!!!!!!」

こいつが何を考えているかなど関係ない。

今すぐこの場で殺してしまえば、それで終わりだ。

吸血鬼のバカ高い魔力に物を言わせて、無詠唱で魔法を発動させる。

「喰らえ！ 闇の吹k」

魔法を目の前の男に打ち込もうとした瞬間、

「つ!!!!!!!!!!」

いきなり場面が変化した。

私は今、広い草原の中心にいる。

目の前には先ほどの男が立っている。

そして私の手には、発動させたばかりの闇の吹雪が解放されずに残っている。

このまま留めて置くことはできないので、目の前の男に向かって放つ。

今度は邪魔をされずに放つことができた。

闇の吹雪が着弾し、煙が上がって男の姿が確認できなくなる。

だが、奴は生きているだろう。

それぐらいの実力はあるはずだ。

……なにせ、私相手にこんなことができる奴だからな。

あいつがしたことは簡単だ。

私が魔法を発動し、開放する前に私のそばに近寄り、私の頭をアイアンクロー気味につかみ、そのまま私を持って、開け放たれた窓から外に飛び出し、開けた草原、つまりここまで連れてきて手を放し、先ほどと同じくらいの距離まで離れる。

たったそれだけのことだ。

たったそれだけのことだが、それをこの男は私が知覚できないほどの速さで行った。

だから私は最初、何が起こったかわからず、いきなり場面が変わったようにしか感じなかった。

周りを見てみれば、200メートルほど離れたところにそこそこ大きい建物が見える。

おそらくそこが、先ほどまで私がいたところだろう。

時間を操る魔法か何かかとも思ったが、先ほども今も、あの男からは魔力を感じない。

……とんでもない体術の使い手か。油断できんな……。

もとよりそんな気はないが、もう一度気を引き締めなおす。

そうして煙が晴れてくると、案の定男は無傷で立っていた。

「全く、いきなり何をするのかね。せつかくの朝食が台無しになるところだったではないか」

「言いたいことはそれだけか。それは貴様がふざけたことを言うからだ。それに貴様こそいきなり私の顔をわしづかみにしたではないか。それで帳消しだ」

「……いろいろと言いたいことは有るが、まあ確かにレディーの顔をいきなり触るのは紳士のすることではなかったね、謝罪しよう。すまなかつた」

そういうと、その男は私に頭を下げてきた。

その行動に、毒気を抜かれかけたが、何とか気を持ち直して、

「それで、貴様の本当の目的はなんなのだ？ まさか気紛れなどではあるまい」

「まあ確かに目的はある」

「やはりな、それはなんだ？ 言ってみろ。一晩の宿代と騒がせ料代わりに聞くだけ聞いてやるっ」

「何、簡単なことだよ。私は君に

友人になつてほしくてね」

第十一話（後書き）

と言う訳で、十一話をお送りしました。

やっと戦闘シーンらしきものを入れられました。

まあ、あくまで『らしき』ですが。

次回も戦闘シーンらしきものはあると思います。

まあ、一方的なものになると思いますが。

余談になりますが、うちのミコトさん、ついにやっちゃいました。

『幼女誘拐』あるいは『拉致』！！

これはお話でフィクションです。

絶対に真似はしないでください。

私と皆さんとのお約束ですよ？

まあ、それはさておき。

皆さんも疑問に思ったことでしょう。

この小説の原作名に、まだ全く登場していない作品があるのを。

お待たせしました！

ついに次回、ブリーチ要素が登場します！！！！

……まあ、オリジナルの斬魄刀っただけなんですけどね。

そんなわけで、対して期待をせずにお待ちください。

それでは今日はこの辺で。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第十二話（前書き）

皆さんこんばんわ。

全く感想や意見が来なくてさびしい思いをしている辺鋭一です。

さて、今年ももう終わりですね。

自分にとって今年とはどんな年だったかな？

なんてことを考えつつ、今年最後の執筆を終えました。

とはいえ来年も変わらずにやっっていくつもりですので、皆様応援、よろしく願います。

それではさっそく、

創造王の遊び場 第十二話 始まります。

第十二話

「友人……だと？」

「いかにも。私は君と友になりたくて、君を我が家に招待したのだよ」

「……そうか、わかったよ……」

「おお、それでは……」

「貴様がイカれているということがよくわかった」

「おやおや、本当のことを言っただけなのにずいぶんな言い様だね」

「もはや貴様の言葉に聞く価値はない。今まで会話が成立していたのが不思議なくらいだ。私はこれで出ていかせてもらう」

「待ちたまえ、出ていくのならばせめて私の話を最後まで聞いてから」

「くどい!! もう貴様の言葉に耳を傾ける必要も意味もない! 私が出ていくのを邪魔するならば貴様とて容赦はせんぞ!! 死にたくなければそのままにしている!!」

「ふむ、そうしてあげたいのはやまやまだが、私としても話を聞いてもらえないのは少々困るのでね。もう少しここにはいてはもらえないだろうか？」

「……もういい。口で言ってもダメならば、貴様を排除していただくだけだ」

そう言っつてゆっくり構えを取る。

「はつきり言っつて普通の人間相手ならばともかくとして、貴様ほどの相手を殺さず無傷で倒すのは不可能だ。そうならない努力は貴様の方でしろ」

「別にかまわんよ。安心したまえ、私を傷つけることは君でさえ容易ではない」

「ああそうかい……。ならば行くぞ！！」

苛立ちの表情を隠さずに、エヴァンジェリンはミコトに飛び掛かり、振りかぶった拳をミコトの顔面めがけてたたきつける。が、

「……やはりこの程度は防ぐか」

ミコトはその拳を片手で受け止めていた。エヴァンジェリンが一度距離をとるために離れるのを見ながら防御に使った右手をぶるぶる振ったり握ったりをしながら、

「うむ、やはりこれが無防備に受けるのは少々危険だね。それにしても、片手とはいえ気で強化した防御の手をしびれさせるとは、吸血鬼の力とは大したものだね。……さすがの私も、無手では少々キツイかもしれない。だから……」

ミコトは左手を虚空に伸ばし、自身の左側にあけた虚空倉庫の入

り口から細長い物を取り出した。

「これを使わせてもらおう」

それは鞘に納められた剣のようなものだが、普通の剣と比べてかなり細い。

それはミコトがそれを鞘から抜き放ったことでさらに顕著に現れる。

その細さゆえ、レイピアの類かとも思ったが、それにしても刃に幅があるし、片刃とはいえ刃もあることから普通の剣でもないだろう。

「……なんだ、その細い剣は？ そんなもので戦うというのか？ 何かに触れればすぐに砕けてしまいそうな細身で、いったい何を切ろうというのだ？」

エヴァンジェリンはそういつてあざ笑うが、ミコトは特に気にせず、

「これは刀と言ってね。旧世界にある極東の島国で使用されている武器だ。この細見からは考えられぬほど頑丈でしなやかだ。達人ともなれば鋼鉄をも切り裂くらしい。外見に惑わされないほうが良いよ？」

「フン、それを私に言うことすらおこがましい。貴様の数倍生きていますに説教か？」

「なるほど、確かに見た^{きみ}目幼女な吸血鬼は強者だ。見た目で判

断することの愚かしさぐらいわかっていて当然だったね」

「なんだか今とてつもなくバカにされたような気がしたぞ」

「気のせいではないかね？ 誰もエターナルロリきみのことをバカにしてはいないよ」

「本当だろうか？ なぜか貴様の言葉には裏があるような気がしてならんのだが」

「そんなことはない。私は嘘と坊主の頭はゆったことがないのが自慢の男だ」

「その言い回しからして胡散臭いにも程があるんだが……」

まあいい、と合法ロリエヴァンジェリンは一息吐

「おいこらちょっと待て、まだ私をバカにする奴がいるぞ！！」

「何を言っているのかね？ この場には私たち2人以外誰もいないではないかね？」

「いや、今確かに誰かが私のことをバカにしていたような気が……。まあいい、とりあえずこれ以上この話題はやめておこう。不毛すぎるからな」

さて、とエヴァンジェリンは一息つき、

「貴様の武器はそのカタナとやらでいいのか？ ずいぶん大切にしているようだが、私にへし折られる覚悟はできているんだろうな

「？」

「ふむ、確かに今回私はこの刀を使うつもりだが、へし折られるのはまずいな。直らないわけではないが時間がかかる。それは勘弁してほしいね」

「ん？ ならば折らないように手加減でもしてほしいか？」

「いや、その必要はない。折れないようにするからね」

「ほう、どうするというんだ？ 刃に障壁でも張るのか？」

「いや、そんなことはしない。ただ、ここうするだけだ」

そう言つと、ミコトは左手の刀を振り上げて、

「轟かせ、『空牙』^{くつが}」

そう言いながら振り下ろす。

途端にミコトを中心に風が起こり、思わず顔をかばい、風がすぐに収まったのを確認して前方を見たエヴァは、

「……………！ ……なんだ、それは」

先ほどの刀とは比べ物にならないほどの大剣を左手に悠々と立っているミコトの姿だった。

先ほどまでミコトが持っていたものは長さ1メートル、幅3センチほどの刃を持つ片刃の刀だった。

だが、今彼が持っているのは、刃だけで長さは1.5メートル、幅は30センチ以上はある両刃の大剣だった。

いや、両刃の、という表現は正確ではない。

刀身には直径4センチほどの鱗の様なものがびっしり隙間なく生えており、刃の部分も例外ではない。

まるで大蛇をまっすぐにのばして押しつぶし、厚さを1センチぐらいにしたような、そんな異様な剣だった。

「この刀は斬魄刀という」

「……ザンパク……トウ？」

「そう。この斬魄刀にはそれぞれに名前があつてね、その名を呼ぶと本来の姿になり力を発揮してくれる。この刀の名は『空牙』くくが。竜の姿を模している、私の力だ」

「……なるほど、蛇ではなくドラゴンか。ずいぶんと面白いものを持っているではないか。……だが、見てくれが変わったからと言って、それがなんだと言っただけだ!!」

叫ぶと同時に、エヴァンジェリンはミコトに飛び掛かっていく。

先ほどよりも早く、鋭い拳を、ミコトは少し剣を持ち上げ、

刀の腹で受け止めた。

「……………!!!」

拳を簡単に防がれたエヴァンジェリンは驚き、急いで先ほどと同じあたりまで離れる。

……………固い。 なんと固さだ！

心中では驚きながらも、決して表情には出さず、攻撃のための剣を盾のように使っている男に対して、

「なかなかの固さじゃないか。 それを壊すのはなかなか骨が折れそうだ」

「お褒め頂き恐悦至極だね。 だがそうだね、この刀を折ることができるか、私に一発でも攻撃を当てることができれば、君がここから出ていくのを止めはしないと約束しよう。 どうかね？」

「ほう、面白い。 その勝負、……………乗った!!」

それからのエヴァンジェリンの攻撃は苛烈の一言に尽きた。

吸血鬼の身体能力を惜しみなく使い、ミコトに立ち向かっていく。

右手での突き、左手でのフック、右足での直蹴り、左足での回し蹴り。

それらを間隙なくつなぎ合わせ、ミコトの右から、左から、時には一瞬で後ろに回ってと、さまざまな位置からミコトの体に向かって叩き込む。

だがミコトは、それらの攻撃をすべて左手で持った『空牙』で受け止めていく。

いくらエヴァンジェリンが裏をかこうとも、瞬時に意図を見破り反応してくる。

何度打ち込んでも結果は変わらない。

そのうち、エヴァンジェリンはじれたのが、魔法を打ち込んできた。

「喰らえ！ 魔法の射手・連弾・闇の31矢！」

宣言と同時に、暗い闇の塊が31、ミコトに襲い掛かる。

だがそれに対しても、ミコトはゆっくりしていると錯覚しそうなほど落ち着いた動きで剣の腹を魔法に向け、

「吠えたまえ、『空牙』。『裂破咆哮』」

その途端、刃が吠え、魔法がすべて停止した。

第十二話（後書き）

はい、と言う訳で、第十二話でした。

今回出てきたオリジナル斬魄刀『空牙』ですが、見た目はNARUTOの鮫肌をもう少し平らにしたようなものだと考えればわかりやすいかもしれません。まあ、鱗一つ一つはあんなにとがってませんが。

その効果については次回紹介する予定です。

まあ、大したものではありませんが……。

今回でエヴァさんとの出会い編は終わるはずだったので、予想外に多くなってしまったので二つに分けました。なので次回が最後になると思います。

……たぶん。

まあ、それは置いといて。

今日が今年最後の投稿になりました。また来年も頑張っていきたいと思いますので、よろしく願いします。

あと、できれば皆様の感想やご意見なども頂きたいです。何も言ってもらえないと、おかしなところがあっても直すことができません。

間違いというものは自分ではよくわからない物ですから。

そんなわけで、よろしく願います。

さて、最後になりましたが、まあ年末ぐらい挨拶を変えても構わないでしょう。

それでは皆様、よいお年を。

第十三話（前書き）

申し訳ありません。

ついに二日に一度更新する、という自分ルールを破ってしまいました……。

いえですね、書いてはあったのですが、手違いでデータが消えてしまいました。

急いで書き直す羽目になってしまいました。

そのせいで本来ならこの話でひとまず区切りがつくはずだったのに、もう一話先に延びることになってしまいました。

本当に申し訳ありません。

とまあ、そんなわけで。

創造王の遊び場 第十三話 始まります。

第十三話

エヴァンジェリンは目の前の出来事が信じられなかった。

……なぜ魔法が勝手に停まる！？

目の前の男が持っている馬鹿でかい剣や障壁で防がれたのならまだわかる。

だが今あの男は剣を片手で魔法を防ぐように構えているだけだ。

そうして技名のようなものを呟いたかと思ったら、いきなり剣を中心に空気が震え、それと同時に私の放った魔法がすべて剣に触れる前に停止した。

その事実には驚いていると、男は剣を振りかぶり、停止させたばかりの魔法を一薙ぎで殴りつけ、すべてを粉々に打ち砕いた。

停止させてから殴るまで、わずか一秒足らず。

たったそれだけの時間で、私の魔法が完全に無効化された。

砕かれ、空に舞った黒い粉は、すぐに大気にとけて無くなった。

……時間停止？ いや、今魔法を砕いたとき、空間も一緒に砕けていたように感じた。ならば空間停止の類か……？

そう考えていると、男は口を開き、

「この剣は竜を模している」

「……それがなんだというんだ」

「わからんかね？ 竜とは最強の存在だ。強い存在は、ただの一声で弱者をひるませ、無力化する。その効果を具現化させたのが、先ほどの『裂破咆哮』だ。この叫びの向く範囲において、すべての存在はひるみ、停止する」

「ならば今一撃で魔法を砕いたのは……」

「空間ごと停止させ、固体とみなして砕いた。大概のものは停めてしまえばもろくなるからね。液体でも気体でも固体でも等しく簡単に砕くことができる」

「………無茶苦茶だな」

「そうでもないさ。停めていられるのもせいぜい数秒だしね。それが過ぎればまた動き出してしまっ」

「……十分な脅威じゃないか。」

戦闘においては、たった一瞬の隙で勝敗が決まることが多い。

その戦闘において、一瞬どころか数秒も停止させられるというのは、脅威以外の何物でもない。

しかもその状態においては一撃で体が砕かれてしまっ。

つまり、剣の腹を向けられたまま一ヶ所に留まってしまえばその

時点で負けてしまうことになる。

……この状況で勝つためには……。よし、やってみるか。

少々の思考ののち、エヴァンジェリンは男に向かって飛び掛かっていった。

ここでエヴァンジェリンのとつたのは、先ほどと同じ高速かつ高密度の全方位攻撃だ。

殴っては移動し、また殴る。

時によっては“殴る”が蹴りや抉るになったりするが、基本は変わらない。

それをひたすら高速で繰り返す。

これならば相手は防御に回らざるを得ず、こちらも移動しているため、空間停止にロックオンされることもない。

だが、攻撃を放ち、ほかの場所に移動してまた攻撃を放つても、男はすぐに反応して、防いでくる。

どんなに早く攻撃しても、自分が一人である以上、攻撃には多少のタイムラグが生まれる。

ほんの一瞬でも、タイミングのずれは消すことができない。

そして、この男はその一瞬に対応できるほどの実力を持っている。
ならば戦況は固まらざるを得ない。

自分はただひたすらに男の体を狙って攻撃をし続け、

男はひたすらにそれを剣で受ける。

男は剣以外で攻撃を受ければ終わりだ。

体は小柄でも、吸血鬼の力はすさまじく、全力の攻撃を喰らえば
普通の人間ならば致命傷になる。

なので相手も防戦に回らざるを得ない。

それが延々と続いていく。

普通の人間ならば肉体的にはもちろん精神的な疲労もたまってい
き、いつかミスをして倒れていく。

だが、この男は普通ではない。

先ほどから全く疲労の色が見えず、やせ我慢しているようにも見
えない。

本当に何でもないとというように平気な顔で攻撃を防いでいる。

こちらにも耐久力は高いので、いつまでも途切れることなく続いて
いくことになる。

……本当にこいつは何者だ？

こんなに若いのに自分と拮抗している。

人並み外れた体力を持ち、さらにとんでもない武器まで持っている。

……いったいどんな人生を過ごせばこんなことになるのか……？

そう考えて、すぐにその思考を頭から消し去る。

……そんなことを考えている場合ではないだろうに……。

今は戦いの最中であり、いかに気を散らさずに動き続けられるかが勝敗を分けるのだ。

無駄なことに思考を割いている余裕などない。

確かに興味深い男ではあるが、今ここで始末してしまえば男の過去になど意味はなくなる。

ならば今は、興味などという感情の一切を捨て、理性による観察のみで動き続けるだけだ。

感情をそぎ落とし、鋭い理性を持って切り崩していく。

それが今、この場を生き残る最善の手だ。

そう判断し、その通りに動き続ける。

だが、次第に相手には余裕が出てくる。

考えてみれば当然のことだ。

高速で動けば動くほど、攻撃について考える期間は減っていき、最終的には今まで積み重ねてきた経験による反射行動のみで動くことになる。

そうならばどうしても行動にパターンが出てきてしまう。

そしてそれは同時に、相手に行動を読まれてしまうということにつながる。

行動が読めるようになれば、あとは次の行動に備えてあらかじめ動いておけばいいので、余裕が出てくる。

こうなると形成は一気に不利になってくる。

だが、これもエヴァンジェリンにとっては計算の内だ。

……狙いは一瞬。それを逃したら終わりだ……。

狙うタイミングは、相手が完全にパターンを読み切り、こちらの攻撃を受けてから次の攻撃の対処に移るその瞬間。

その瞬間に、相手が構えたのと反対の方向に移動して攻撃すれば、相手はそれに対応できず、攻撃を喰らう。

そして、

……今だ！！

エヴァンジェリンは剣を殴りつけ今までの流れならば攻撃を行うはずだった場所に梟が向かうのを確認するとすぐにその反対側に回り込んだ。

「喰らえ！ 魔法の射手・連弾・闇の31矢！」

やっとのことで見つけた隙に、魔法を叩き込む。

だが、男もそれに気が付いて、すぐに剣を魔法が向かう軌道上に送り込む。

おそらくタッチの差で、魔法は間に合わず、剣にあたってはじけるだろう。

……だが、それも計算の内だ。

エヴァンジェリンは魔法を放った後、その結果を確認することなく、すぐにその反対側に移動する。

そして、今度は己の拳を振りかぶり、がら空きの胴体に叩き込む。

これがエヴァンジェリンの策、魔法と自分の同時攻撃だ。「コンビネーション」

これならば、二つの攻撃のタイムラグはなくなり、男は二つの攻撃を同時にさばく必要が出てくる。

ただでさえ予想外の攻撃が来て戸惑っているところに、さらにもう一つの攻撃を防ぐことはできないだろう。

対応できるのはせいぜいどちらか一方のみ。

もう一方は喰らってしまうだろう。

そして、今放った攻撃はどちらもまともに喰らえば命はないほどの威力を持っている。

……これで、終わりだ！

視界の端で男の驚いた顔を見ながら、自分の思い描いたビジョンに現実が近付いていくのを感じていく。

そして、

魔法と拳が同時に着弾した。

……ほう。 こちらを受けたか。 てっきり魔法の方を防ぐと思
ったのだがな。

エヴァンジェリンは拳を通して感じる固い手ごたえからそう判断
するが、

「ふう。 危ないところだったね」

その声に、今まで思い描いていたビジョンが砕かれたのを感じた。

……なっ、なぜだ！？ どうして今ので生きていられるんだ！？
そう思ってよく見てみると、

「な、なんだこれは……」

鉄色の帯が男を取り囲んでいた。

その帯は男の周りを少しずつずれながら三週ほどしており、その端は男の持つ剣のつかにつながっていた。

それを見て、目の前の帯がその剣だと判断すると、

……まずい！！

すぐにその場を離れ、最初の位置まで跳び戻っていった。

目の前にあるものがあの剣であるならば、空間停止をかけられてもおかしくない。

今までそれを警戒して高速移動を続けていたのだから。

なのにその剣に触れながら考え事など自殺行為でしかない。

そう思っただけの回避行動だ。

それを見た男は、帯を短く縮めていき、元の大剣に戻した。

状況から考えるに、あの帯で魔法と拳の両方を防いだのだろう。

「……本当に滅茶苦茶な剣だな。その固さに加え、長さや形まで変えられるのか」

「当然だよ。竜族の鱗の固さは全生物一だからね。竜を模したこの剣の固さもそれぐらいあって当たり前だ。そして、迫りくる脅威に対して何の反応も示さないなどということはありえない。迎え撃つぐらいのことはできなければ最強種とはいえんだろう」

話を聞けば聞くほど理不尽な性能だ。

形まで変わるということは、あれは全方位に対応できるということだ。

そうなれば、いくら同時攻撃を行っても完全に防がれてしまうだろう。

それ以前に、もう不意打ちは通用しないと考えなければならぬ。

同じような手が二度も通用する相手ではないだろうと、それくらいのことはもうわかつている。

……こうなると、もう残された手段はほとんどないぞ……。

いや、一つだけ、あるにはあるが、この状況では使えないだろう。

彼我の戦力差に軽く絶望しながらも、あることに気が付き、その絶望が怒りに変わる。

……まさか、こいつ……!!

「……きさま、なぜ本気を出さない!？」

……いや、それどころか

「なぜ一度も攻撃してこない!？」

第十三話（後書き）

さて、そんなこんなで十三話をお送りしました。

今回の話は衝撃の展開、というかこんなはずじゃなかったのに、という場面が出てきましたが、
そういう場面において、自分は何行か空白を作ってなんとなく切り替えのようなことをしているのですが、
やはり

とかのように区切りはわかりやすいほうが良いのでしょうか？

でもはっきりサイドが変わっているわけでもないし。
どうしたもんか、という塩梅です。

その点について（そのほかについてでももちろん歓迎ですが）意見のある方はお教えいただけると幸いです。

さて、次回は今回の続きです。

それ以外はいえませんが、ごめんなさい。

こんなダメ人間の書いている駄作ですが、また見ていただけると嬉しいです。

それでは今日はこの辺で。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

P . S .

1 / 4 に一部加筆しました。

一人連携を受け止められてからのエヴァンジェリンの回避行動時のあたりです。

第十四話（前書き）

最初に言っておきます。

すみませんでした！！

この話でエヴァさんとの出会いは終わらせるつもりだったのですが、書き直しているとなぜか消えてしまった分より分量が多くなってしまい、急ぎよ二つに分けることになってしまいました。

言っていることが二転三転する無計画な人間の書く駄作ですが、それでも良ければぜひ読んでいってくださいませ。

そんなわけで今日もまた、

創造王の遊び場 第十四話 始まります。

第十四話

エヴァンジェリンはどうすればこの男に勝てるか、考えていた。

……あの防御性能に加え空間停止能力……、厄介以前に理不尽だな。

ほとんどの物理攻撃は防がれ、魔法による範囲攻撃は空間停止により止められ砕かれるか剣の変形による広範囲防御で防がれる。

……というか、あれで全身をおおわれてしまえばどんな攻撃も通らなくなるんじゃないか？

おそらく不可能ではないだろう。

それぐらいのことはやってのけても不思議ではない。

……ならばどうする？ どうやってあの防御を砕く？

あるいは、

……どうすればあの防御を砕ける状況まで持って行ける……？

実を言うと、エヴァンジェリンは勝つための方法を考え付いていなかった。

自身の持つ最大の魔法を撃ち込むこと。

今のエヴァンジェリンができる最強の魔法を撃ち込めば、防御など意味をなさなくなる。

……だが、今は撃てない……。

だが、大きな魔法を撃つためには、当然かなりの時間と集中を要し、その間自分には無防備になってしまう。

……くそっ！ チャチャゼロさえ修理できていれば……！

だが、自分の従者であるその人形は、今は壊され影の中に保管されて修理を待っている状態だ。

当然修理している暇などない。

本来魔法使いの役割とは後衛であり、前衛の従者が敵をひきつけ時間を稼いでいる間に大威力の魔法を準備し発動させ敵にとどめを刺すのが仕事で、究極的に魔法使いとはただの砲台であるともいえる。

よって従者のいない今、大規模な魔法を使うのは危険が伴う。

……とはいえ方法はこれしかない。何とかしてあいつの動きを止めなければ……。

いろいろな策を考えてはみるが、今一つ決定打に欠けるものばかりだ。

だが、その策を考えているときに、ふいにあることに気が付き、その絶望が怒りに変わる。

……まさか、こいつ……!!

「……貴様、なぜ本気を出さない!？」

考えてみれば簡単なことだった。

……あいつ、ここに来てからほとんど動いてない……。

自分が攻撃している間は動かないのは当たり前だ。

あれだけの高密度の攻撃にさらされればその対処で精一杯になり、体の向きを変える以外はできないだろう。

だから、この男が動かないのは当たり前だと思い込んでよく考えもしていなかった。

だが今になって、落ち着いて考えてみると、おかしいことに気が付く。

攻撃の間はともかく、それ以外の時間には動かない意味がないのだ。

たとえば、先ほどの会話の最中。

たとえば、自分の考えが覆されて無様に呆けていたとき。

そしてさらに、のんきに考え事をしている今この瞬間。

そのいずれかで動かれ、空間停止を撃たれれば、自分は簡単に終わっていただろう。

いくらでもチャンスはあった。

なのに今自分はこうして生き残り、愚かにも考え事をしている。

もし立場が逆ならば、自分は相手を三桁は殺せているだろう。

これの意味することは、

……明らかに手加減されている……！！

それだけでも屈辱的だが、さらにこの男は、

「なぜ一度も攻撃してこない!？」

この戦いが始まってから、目の前の男は、自分に対し一度も攻撃を放っていない。

最初に行ったのは戦闘場所を変えるための強制移動であったし、それ以降は剣で物理攻撃を防御するか魔法を停止させて打ち砕いただけだ。

……こいつは……！！

怒り、悔しさ。

それらの黒い感情がエヴァンジェリンを支配していく。

「私など戦うまでもないということか!？」

100年間生きてきた不死者としての自信。

そして、吸血鬼の真祖としての、最強種としてのプライド。

自分を形作る重要なアイデンティティを、人間の若造ごときに打ち砕かれた。

これでは先ほどまでいろいろと考えていた自分がバカみたいではないか。

その思いに耐えきれなくなり、想いを叫びとして吐き出す。

「……貴様、私を侮辱するか!！」

エヴァンジェリンの血を吐くような怨嗟の叫びに対し、男は少々困ったように眉を顰めながら、

「侮辱？ そんなことをしているつもりはないのだが？」

「嘘をつくな！ ならばなぜ手を抜く！？ 貴様には私を攻撃するチャンスがいくらでもあったはずだ！ なのになぜ防御ばかりで何もしてこない！？」

「……ふむ、どうやら私と君の間には見解の相違があるようだ」

「見解の相違だと？ いったい何の事だ！？」

「この戦いにおいて、君の目的はここから離れること。そして勝利条件は私に攻撃を通すかこの剣を破壊すること。そうだろうか？」

「……そうだ」

「だが、私の目的は君に話を聞いてもらい、できれば友となることだ。そのためには君に出ていかれては困るので攻撃されないように防御に専念している。……つまり、私の勝利条件を満たすために、君へと攻撃する必要がある。……というより、私が君に攻撃するということは、私の敗北につながる」

「……どういふことだ？」

「言ったたろう？ 私は君に友となつてほしい、と。だが戦闘により屈服させて、畏怖と敗北感で縛り付けるといふ関係は友とは言わず、よくて部下、最悪しもべや奴隷と呼ばれる存在となつてしまふ。……それでは何の意味もない。私が望むのは友という対等な関係、ただそのみだ。だから君に攻撃することはできない。……だが、私の勝手な思いが君の心を傷つけたのなら謝罪しよう。……すまなかつた」

毒気が抜かれていくように感じた。

目の前の男が言っていることは正真正銘の戯言だ。

普通ならバカにされていると受け取られるだろう。

だが、この男の声は真剣だ。

この男の眼はまっすぐだ。

そして、この男の意志は自分の心に響いてくる。

間違いなくこの男は、本気で言っているのだろう。

例え今回のように格下の相手でなく、本気で戦っても勝てない相手であっても、たとえそれで自分が殺されてしまつても、攻撃しないと決めたならば一切攻撃せず、自分の意志を貫き通す。

それはとても難しいことで、だがそれを、この男ならば当たり前のようにやってのけるであろうこともわかつてしまつて。

それによって、自分の中の黒いモノが薄れていくのを感じてしま
って。

……久しぶりに見たな、こんなバカは。 ……いや、ここまでの
は初めてか？

なんだか、嫌いになれなくなっていた。

「わかった。 そのことはもういい。 許す」

「そうか、許してもらえて何よりだ」

「……私はこれから、貴様を殺すために私の持つ最大の魔法を放
つ。 ……貴様の放った言葉が本物だというならば、よけずに受け
止め、耐えて見せろ」

「……いいだろう。 かかってきたまえ」

「ずっと思っただけだが、貴様本当に偉そうだな？」

「今まで何度も同じことは言われている。 だが、これも私の個
性だ。 そう思っただけであきらめてくれたまえ」

「まあ、偉そうな口調なのは私も同じだがな……」

そういいながらエヴァンジェリンは空へと飛び上がり、ゆっくり
とのぼっていく。

そして、地上から100メートルほど上ったところで動きを止め、

呪文の詠唱に入る。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い、我に従え、
氷の女王。 来たれ、とこしえのやみ、えいえんのひょうが」

呪文を唱えた瞬間、男を中心に50メートル四方が氷に包まれ、
白く染まっっていく。

当然男の姿も氷に飲み込まれ、見えなくなっている。

それでもまだ呪文は止まらない。

「全ての命ある者に等しき死を。 其は、安らぎ也。 『おわる
せかい』」

呪文の完成と共に、巨大な氷の山にひびが入り、瞬く間に粉々に
崩れ去っていく。

その際に砕かれていくのは氷だけでなく、氷に閉じ込められたも
のと同じ運命をたどっている。

それを見ながら、エヴァンジェリンはつぶやいた。

「ほぼ絶対零度。 150フィート四方を極低温にする広範囲完
全凍結殲滅呪文だ。 ……これを喰らっても同じことが言えるなら
ば、貴様は本物だと認めてやろう」

普段の自分ならば、ここで氷を砕かず、封印する詠唱の方を唱え
るのに留めていた。

それならば動けないまま氷の中に閉じ込められるだけなので、殺さずに済むからだ。

だが、絶対に生き残れないとわかっているとしても、心のどこかで『あいつなら大丈夫だ』という確信めいた思いがあり、気が付けば氷を砕く方の詠唱をしていた。

矛盾する想いを抱え、粉々になった氷が舞い散り、煙幕になっている平地を見下ろす。

だんだんと晴れてくる視界を目を凝らしてみると先ほどまで男がいた場所には、

「やはりな」

鉄色の卵があった。

第十四話（後書き）

はい、と言う訳で、十四話をお送りしました。

いやあ、本当に計画性って重要ですね。

前回の消しちゃった分を急いで書き直していたら『あ、ここはこうしたほうが』とか、『ここはもっとこうしたい』などという欲がどんどん湧いてきまして。

気が付けば二話分の分量になっていましたとき。

しかも急いだあまりあとがきを忘れていて、急いで書いている始末。これを含めれば、1/4に投稿する、という約束すらオーバーしてしまっていることになります。

ホント、ダメ人間ですね。

とまあそんなことを思いつつ、今日はこのあたりでお別れといたしましよう。

もう次回の分は書きあがっていますので、今度こそは1/6に投稿
& a m p · 出会い編完結となります!!

お楽しみに!!

では、今日はこの辺で。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

第十五話（前書き）

はい皆様ごきげんよう。

今日は余裕をもって投稿できました。

ですが今日（1/6）から大学が始まります。
提出物に合わせてテスト対策もあるため、2週間ぐらいはまともに
投稿できるかわかりません。

そんなわけで、次回の投稿までに日が開くかもしれませんが、ご容
赦ください。

そんなわけで、今日も飽きずに。

創造王の遊び場 第十五話 始まります。

第十五話

直径2メートルほどの鉄色の球体は、近くにエヴァンジェリンが降り立つのと同時にほどけ始めた。

だんだんとほどけ、球体から帯状のものになりその中が見えるようになって、そこには、

「さて、今回はどんな手品を使ったんだ？」

「なに、大したものではないよ」

平然と立つ、あの男がいた。

鉄の帯を剣に戻し、地面につい立てた男は少々眉を顰めながら苦笑気味に、

「しかしひどいことをするね、君は。せつかくきれいに手入れされていた草原が更地になってしまったではないかね」

その言葉と共に、エヴァンジェリンが辺りを見渡すと、確かにきれいに生えそろっていた芝は凍り砕かれてしまい跡形もなく、ひび

割れデコボコになった地表が見えていた。

それを眺め、それから視線を男に戻し、苦笑を浮かべながら、

「それはすまないことをしたな、謝罪しよう。 すまなかった。

……だが、先ほどの魔法はかなり危険なものはずなのだが、どうしてお前は生きているのだ？ 教えてくれ」

と尋ねた。

絶対零度近くともなれば寒いではすまず、一瞬で凍りついてしまう温度だ。

この魔法の効果から逃れるには、発動する前に効果範囲外に逃げるしかない。

生半可な障壁では障壁ごと凍ってしまうし、よほど断熱をしつかりさせなければ障壁内の温度が奪われ凍死してしまうだけだ。

だが、目の前の男は剣 もはや剣と言っていいのかわからないが の壁だけで、しかも障壁の類の付与もないように見えるのに、目の前で平然としている。

「なに、簡単なことだ。 空牙で球殻を作り、そのうえで外側に向かって『裂破咆哮れっぱくほうこう』を放ち続けたただだよ。 冷気も何も無い空間で止めてしまえば中の熱は奪えないからね」

それを聞くとエヴァンジェリンは急に笑い出し。

「……くっ、はっはっは！ そうかそうかそう来たか。 それで

は貴様が生きているのもわかる。まあ、貴様しかできん荒業だからだれにもまねはできんだろうが、なるほどな。そう言う回避方法もあったか。勉強になったよ」

ひとしきり笑った後、エヴァンジェリンは一息ついて、

「さて、これで私が今打てるすべての手段を試した。これでも貴様を倒せなかった以上、私の負けを認めよう。……貴様の勝ちだ、好きにしる」

その言葉を、剣を刀に戻しながら聞いた男は、

「好きに、と言われてもね。とにかく話を聞いてもらうしかないのだがね」

「ならば気が済むまで聞いてやる。何でも言ってみる。何が目的で私に近付いた？ 私の吸血鬼の呪いでも解いてくれるのか？ ん？」

エヴァンジェリンは冗談で聞いているのだらう、楽しそうに笑っている。

だがそれを見た男は、

「そんなことをして何の意味があるのかね？」

と真顔で聞いてきた。

その言い方に少々苛立ったエヴァンジェリンだったが、すぐに気を静め、聞き返した。

「意味も何も、私はそれで化物から人間に戻り、人間として生活できる。何かおかしいか？」

「そんなことは不可能だろう。今更呪いを解いた所で利益はない。今まで君がしてきたことは呪いを解いても消えてなくなるわけではない。精々化け物ではなく人として処刑されるという自己満足が得られるぐらいだ。それで良いのかね？」

その答えも自分で気が付いていたのだろう。エヴァンジェリンは男の言葉を聞いても少々眉をひそめる程度で話の先を促した。

「……ならば何が目的だ？ 貴様は何故私に近付いた？」

「私が君に近付いたのは実に個人的な理由のためだよ。先ほどから言っているが、私は友が欲しくてね」

「友、か。まあ、友人がほしいという願望は誰にでもあるものだからな。わからんでもないが、なぜ私だ？ 知っていると思うが、私は不老不死だ。友になったところで貴様と私ではすむ時間が違う。友人関係などすぐに崩れ去るぞ」

「その通りだ。だがその前提条件として、私が普通の人間であるということが出てくるね」

「そうだな。だが、貴様がたとえ長寿の種族だとしても結果は変わらない。崩壊までの時間が少々長くなるだけだ。そんなものに何の意味がある？」

「ならば、私が不老不死の人間であると言ったらどうするかね？」

「……はっ！ 何をバカなことを。　そうそう不老不死の人間が
いてたまるものか」

「そうかね、ならば証拠を見せよう」

その言葉を放ちながら、男は虚空に刀をしまい、ついでとばかり
に別の剣を取り出した。

「……証拠？　いつたい何を　」

その言葉を聞きながら、男はその剣で自分の腕を切り落とした。

「　　！！　貴様、なんの真似だ！？」

男はさらに、胸の中心、心臓のあたりに剣を刺しながら、

「何の真似、と言われてもね。　自分の不死性を証明しているだ
けだが？」

剣を抜きながら男は言う。　そしてその胸を見れば、

……傷が、ない！？

さらに切り落とされた腕を見てみると、腕は霧のように崩れ、漂いながら本来のあるべき場所に戻っていくところだった。

少しの間それを眺め、完全に腕が戻り、男が腕の調子確かめるような動作をしたところで我に返り、

「貴様、本当に不死なのか!？」

「だからそういつている。ただ、不死はともかく、不老の方は今すぐ証明することは難しいのだが……」

「いや、いい。これで貴様の異常なほどの戦闘能力にも説明がつく。その若さでこれほどは、と驚いていたが、そういうことだったか。それで貴様、何年生きている?」

「信じてくれて何よりだ。だがそうだね、かれこれ……2000年程かね?」

その言葉に、さすがのエヴァンジェリンも驚き、

「2000!?! 私の倍じゃないか! それではかなわんわけだ。私の先輩ではないか」

「まあ、生きている時間だけならばもう少し長いがね。時間の流れの違う少々特殊な空間にいてもあるので、実際にはそれ以上生きていることになるが」

「……なるほどな。それで友人に同じ不老不死である私を……」

「そうとも。不老不死の何が一番辛いかと言えば、友人が作り

辛いということだ。なにせ君も言った通り、有する時間が有限である彼らと違い、我らは無限の時間の中に囚われている。下手に友人など作っても、いつか一方的な別れがやって来る。その孤独に耐え切れず、友人を創りだしてしまう者もいる。……君のような時間の囚人をね。だが、私はそんなことはしたくない。この辛さを感じる者を増やしたくない。だが私も元人間だ、友人は欲しい。このジレンマを抱えて困っていた所に同じ辛さを知る同胞が現れた。ならば友人になろうとするのに躊躇いなど有るはずも無い」

その言葉を聞き、エヴァンジェリンは意地の悪い顔で笑いながら、

「なんだ？ 要するに傷の嘗め合いがしたいのか？」

と聞くが、

「そうだともし」

と一言で即答され、あつけにとられることになる。

その顔を見て、男は心外そうな表情を浮かべ、

「……何を驚いた顔をしているのかね？ 詰まらぬ見栄なぞ張ったところで結果が変わるわけでもないだろうに」

と言い切った。

さらに続けて言う。

「……何、傷の嘗め合いも良いものだよ。大概の傷は嘗めてお

けば治るのだからね。だからエヴァンジェリン君……、

私の友となってくれ」

そういつて差しのべられた手を、エヴァンジェリンはあっけにとられたように見て、

「……私は犯罪者だぞ？ 賞金首だぞ？ 追われているんだぞ？」

「なに、大したことではない。もとより君の犯した罪はほとんどが正当防衛だろう。それに君はなるべく人を殺さないようにしているし、女・子どもも手につけないというじゃないか。それは立派なことだ。 誇っていい」

その言葉に、エヴァンジェリンはふと視界が悪くなり、あわてて目をこすると、そこには、

……涙、か？

誇っていいと、そんなことを言われたのは初めてだ。

吸血鬼となつてからは、周りから聞こえる声は全て自分がいなくなることを望むものだったから。

だから、誰にも望まれない生を、それでも誇っていいと言われたのは初めてだった。

いくら拭っても、いくらでもわいてくる液体に苦戦しながら、男の話聞く。

「追われていても構わない。私が君を守るう。何、友となる者を守りたいと思うのは当然のことだ。気にすることはない」

「……私は、……私は生きていていいのか……？」

ポツリとこぼれた言葉に対しても、男は誠実に答えてくれる。

「生きていてくれなければ困る。君がいなくなれば、私と語り合える友が一人なくなってしまう。それはとても寂しく、悲しいことだ。だから、私は君に生きていてほしいと望む」

「……貴様は、……私の居場所になつてくれるのか……？」

こぼれる疑問がまた一つ。それでも男は答える。答えてくれる。

「君がそう望むならば、私は君の居場所となり、君に安心を届けると約束しよう」

「……私は、……私の生を、……誇っていいのか……？」

「当然だ。君は先ほど、私が手を抜いていると怒ったね？ それは君が、誇りを持って生きているからだ。だから君はその誇りを踏みにじられたと感じた時、怒りの声を上げた。その誇りはと

ても尊いものだ。だから君は、その誇りを、そしてその誇りを抱くことができた君とその生を、誇りに思うべきだ」

男のその言葉に、エヴァンジェリンはついに泣き崩れる。

だがその涙の冷たさも、心に生まれた温かい気持ちは冷やせない。

そうしてうずくまるエヴァンジェリンに、男は手を差し伸べ、

「さあ、どうかねエヴァンジェリン君。私の友に、なっってくるかね」

その言葉に、あふれ出てくる涙をぬぐいながら、それでも声を震わせないようにしながら言う。

「……エヴァンジェリン……」

あまりにもかすかにしか聞こえない声に、男は眉を顰め、

「……すまない、よく聞き取れなかった。もう一度言ってはくれないか？」

そして、何とか涙を止め、真っ赤になった眼以外はいつもの通りになった彼女は言う、

「……エヴァンジェリン。エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル。私の名だ。お前の名を聞いていなかったからな。私は名乗った。だからお前も名乗れ」

その言葉を聞き、男はにこやかに笑い、

「ミコト。ミコトという。さあエヴァンジェリン君、答えを聞こう。私の友に、なってくれるかね？」

「その前に、私から二つ頼みがある」

「……？ 何かね」

「私のことはエヴァと呼べ。長ったらしいのは嫌いだ。……

それと」

「それと……、何かね？」

「私の、私の友となってくれないか？ ミコト」

その言葉に、ミコトは驚きながらも破顔し、

「喜んで。私は君が望む限り、君の友であることを誓おう」

その言葉に対し、エヴァは同じように微笑んでミコトの手を握り、

「ならば私も誓おう。私はお前が望む限り、お前の友であることを誓う。……よろしくな、我が友、ミコト」

「私の方こそよろしく頼むよエヴァ君。……そして」

ミコトは言葉を一度区切り、手を大きく広げ、言った。

「ようこそ、私の遊び場へ……！」

これが、生涯の友であり続けた、ミコトとエヴァンジェリンの出会いであった。

第十五話（後書き）

はい、と言う訳で、第十五話でした。

今回の話ですが、エヴァさんの心変わりが激しいんじゃないか、と自分の中では思ったのですがいかがでしたでしょうか？

一応主人公の誠実さにあてられた、ということになってますが。

これまでの100年間まともな人物と出会っていないので、その反動でいつきにキテしまった、って感じてでしょうかね？

それと、十一話から十五話の最後の方までにかけて、ミコトさんの名前が一切出てこないのは、基本的にエヴァさんサイドで書いたものだからです。

なのでミコトさんの思ったことは書いてません。

まあどうしようもなくて、第三者視点というか、俯瞰したような視点も出てきてしまいましたが、これがわたくしの文才の限界だと思っただけであきらめてくださいますようお願いします。

そう言えば絶対零度化では物質は崩れてしまう、という話をどこかで聞いたので、今回の話でも使おうと思ひ、調べてみたのですがそれは誤りだということがわかりました。

おかげで少し修正しなくてはなりませんでした。

皆様も誤情報にはおきおつけください。

そんなわけで、次回はいつごろお会いできるかわかりませんが、次回会う時までお元気で。

それでは最後に。

ここまで読んでくださったあなたに、最大限の感謝を。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1988z/>

創造王の遊び場

2012年1月6日12時52分発行